

川柳の雑記



Nojiti

麻生路郎☆主筆

十月号

No. 425

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社十月句会

一句集「有情」出版祝賀

11月本社句会

兼題
胃 険
あと味
ホステス
はげくち

秋だ 秋だ 句の秋だ！

一人でも多く出席いたしましょう。

日時 十月七日(日) 午後六時

会場 自安寺 (211) 一四七八番

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「後 輩」(三題) 中島生々庵選

「乗り越し」(三題) 戸田古方選

「片 粹」(三題) 後藤梅志選

「腰」(三題) 山田阿茶選

席題 三 題(当日発表)

川村好郎

呈賞 各題天位・各題天位から西乃進により不肖

調賞

会費 百円

幹事 榮吉・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂

志・詩人・水洞・すむ・黄風子・柳宏子・舟

遊・一三犬

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切十月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪編六〇八一

大阪市民文化祭第14回川柳大会

恒例による大阪市民文化祭の川柳大会は左の通り第十四回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されますよう、おすすめてください。又ごなたも出句の有無にかかわらずご来場の程お待ちいたします。

主催 大阪市、大阪市教委
関西短詩文学連盟
後援 毎日 新報 社

日時 昭和37年10月13日(土)

一時開場、二時開会

会場 毎日新聞大阪本社講堂(市電桜橋)

司会 西尾 榮

開会の辞 武田 北人

挨拶 大阪市教育委員会

同演 関西短詩文学連盟(幹事長) 麻生 路郎

講演 病氣と川柳 北川 春巢

席題 二題当日発表

兼題 「信・用」 堀口塊人選

「棧橋」 中島生々庵選

「出世」 石井黙平選

「ラッシュユアワー」 川村好郎選

余興 バイオリン演奏 CMC児童音楽サークル

閉会の辞 飾 間 杏花

川柳賞 席・兼題優秀句に大阪市長・教育委員長から文化祭川柳賞を贈呈。

おことわり 既報の通り黙平氏選の「手相」は選者の希望により「出世」に変更されたので投句家諸氏の

ご了承をお願いいたします。(係)

入選句集 希望者に頒布。(五〇円、郵券可)

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



土地が沈むとよ平気でいる庶民

豚まんをむきほり食いぬ恋なきB G

残暑きびし 光りをハネ返えずがく額

地蔵盆恋の手習するもよし

鍵一つで安心するも女なり

無収入の日もあり苦にもせずに生き

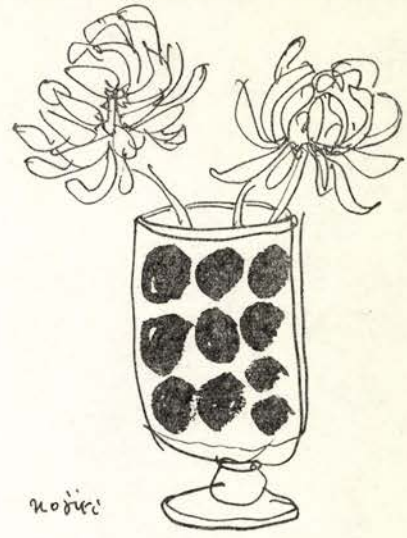
秋は秋だけの淋びしき酒にする

巡査を殺ろして逃げられるつもりかね

年寄りの日にビール一本の欲となりたり

川柳雑誌 十月号 目次

★柳柳室……………(46)	★柳界展望……………(36)	各地柳壇……………(33)	金泥集……………(20)	近作柳榊……………(11)	同舟近詠……………(6)	川柳塔……………(6)	男娼……………(37)	★不朽洞の人々……………(37)	男不確定の記憶……………(18)	和漢の賢女……………(40)	大万川柳「チャンス」発表……………(41)	ホルモン……………(14)	★現代柳人録……………(40)	★一路集の選をして……………日満・白星……………(34)	★川柳雑記……………石井かんな……………(20)	★川柳書架……………(15)	中島生々庵……………(15)	富士野鞍馬……………(28)	山木葉光追悼句会……………(26)	奥津啓一朗……………(33)	★飛燕往来……………(19)	路郎生……………(18)	麻生路郎選……………(6)	諸家選……………(11)	北川春郎選……………(20)	麻生路郎選……………(20)	麻生路郎選……………(20)	松江梅里選……………(37)	山根白星選……………(34)	木村水洞選……………(35)	▼ペン の 散歩……………(46)	句評リレー……………(26)	白梅志……………(26)	清生明……………(26)	戸田古方……………(30)	正本水客……………(29)	東野大八……………(16)	伴睦という川柳人……………(16)	秋のこと……………(16)	「ハコ」愚談……………(30)	不朽洞句帖……………(3)	吉川英治と川柳……………(12)	俳句と川柳……………(38)	のびた平均寿命……………(27)	中島生々庵……………(27)	阿部佐保蘭……………(12)	麻生路郎……………(3)	野尻弘……………(3)
---------------	----------------	---------------	--------------	---------------	--------------	-------------	-------------	------------------	------------------	----------------	-----------------------	---------------	-----------------	------------------------------	--------------------------	----------------	----------------	----------------	-------------------	----------------	----------------	--------------	---------------	--------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	--	----------------	--------------	--------------	---------------	---------------	---------------	-------------------	---------------	-----------------	---------------	------------------	----------------	------------------	----------------	----------------	--------------	-------------



川柳

名句と難句

麻生路郎

西成界わい

「お前はすべったそうじゃないか」

「ウム、すべったよ」

「おッ母さんが、かわいそうだなア」

「しかたがないよ、叔父さん。一回ぐらゐの浪人は常識なんだ。」

と、息子の方は案外平気でいることを詠んだもの。「ぬけぬけと」の下五がよく利いている。

この句、大学入試のきびしさから生れたものだが、一浪は一回浪人の略語。

〔三八七〕

針金のような腕へ麻薬を刺し

(満潮)

悪の花の栄えるスラム街に、生きる人たちの生活の「トコマ」を写した句として凄惨な気が迫って来る。

「針金のような腕へ」の措字が、息も絶え絶えの麻薬患者をうきほりして見せるではないか。

〔三八八〕

泣いて頼んで認証式は澄しこみ

(牧人)

この機を外すしたら、もう大臣の椅子は廻って来そうもないので、泣いて頼んで大臣の端っほに加えてもらったたくせに、認証式ともなると澄ましこんでいると云うのであるが、そのウラには大臣病患者だったこの大臣へ軽侮と嘲笑を浴びせかけているのである。句の表では、アッサリと詠んではいるがなかなか痛烈な句だ。

次に認証式について簡単な解説をしてお

〔三八二〕
本心を丟者ワルツで試めされる

(初甫)

どうせ一緒にゃくらせぬ身体と、唄いながら踊りながらも、男の本心を試めそうとする芸者ころの哀れさがにじみ出ている。試めされるのは男であるが、試めす女の方が主役の句だ。

流行歌、ゲイシャ・ワルツは西条八十作詞、古賀政男の作曲である。

〔三八三〕

特急に蠅が乗っていた乗っていた

(季 贊)

豪華な特別急行列車に、蠅が乗っているのをフツ見つけて、自分等はなかなか特急なんかに乗れないのと思うと、一種のねたましきを感じたのであろう。一つの発見である。

曇み句で、強く表現したのもいい。

〔三八四〕
陸軍と言うものありし父の歌

(宵明)

父は寡黙の人だが、晩酌のあと、時に父の口から歌声が漏れることがある。それは遠く異国の空で歌ったと云う軍歌だった。父は九死に一生を得て帰還した出征軍人だった。その頃は一枚の召集令で、好むと好まざるにかかわらず戦争においやられる運命を持つ陸軍と云う制度があった。

父の軍歌はその名残りである。その歌を歌う父の顔には、北滿に戦った郷愁が浮びあがっているように見えた。句中の父が、作者自身であるか、どうかは判らぬが父の歌から、父の時代を回想する子の感懐がよく出ていると思う。

陸軍と云うは陸戦を任務とする陸上兵力で、エジプトの武士階級がその起原だと云うことだ。今の日本は陸軍は持たぬことに

なっているが、自衛隊の陸上部隊がそれに代わるものと云えるだろう。

〔三八五〕

敢然と一千万の中へ行き

(愛場)

「いよいよ行くか」
「今の僕には、東上以外に生きる道がないんだ」
「からだを大事にしたまえ」
「有難う。では行って来るよ」

と、友は敢然として東上したと云うのである。更に中七の「一千万の」が句意を強めている。一千万は東京都の人口。

〔三八六〕

一涙は常識だよとぬけぬけと

(好祐)

次

こう。

認証官が任命されるとき、天皇が認証する儀式を認証式と云うのであるが、認証官を任命するのは内閣であるから、認証式は儀礼的なものに過ぎない。認証官と云うのは任免について天皇の認証を要する官吏、詰まり内務大臣、宮内庁長官・最高裁判事・高等裁判所長官・人事官などである。

〔三八九〕

彼女怒ってお好み焼を裏返す

(三 窓)

彼氏と彼女がお好み焼屋の椅子を占めた。それは若きサラリーマンとBGとしておこう。二人の間にわだかまった問題の解決にきたのかも知れない。

男のあいまいな返辞に、彼女は怒ったが、それを、あからさまに、男に怒ることも出来ず、激しい態度で、お好み焼を裏返したのである。そこに彼氏に対する愛情の断ち切れぬものがあることが感じられるではないか。表現上の巧みさを称えたい。

〔三九〇〕

竜舌蘭大手ひろげて威張るなり

(恵二朗)

竜舌蘭(リゅうぜつらん)を擬人法で読んでズバリと云う句だ。

竜舌蘭はリゅうぜつらん科の常緑大形の多年草である。メキシコ原産で、暖地の海岸に栽培されるそう。葉は多数に叢生し、多肉、長大形、中央部が緑白色、フチは黄

色で、硬針が並列している。この句が生れたのである。日本では稀に花を開いて枯死するそうだが詳しいことは知らない。

〔三九一〕

一票に次郎長がある恥しさ

(日 満)

選挙に立会ったところが、開票された一票に、次郎長と云うのがあった。

選挙に対して無理解なのに驚くとともに、わがごとくのように顔のあからむのを見たとき云うのである。

一票に次郎長どころか、石川五右衛門さへ出て来る。ホントに恥しい話だ。選挙開票場風景の一トコマ。

〔三九二〕

女社長ゴルフで尻を振ってくる

(生 薑)

ゴルフが、単なるスポーツでなく、官庁や会社などの社交に利用されるようになった。女社長の姿がチラホラ見えるようになった。女社長と云えばM過剰でデブさであることが条件のようでもある。この句を一読すると、ほおえまじさを禁じ得ないのも、それがためだ。クラブを振ると云うよりも、「尻を振ってくる」と云う表現にユーモラス感が湧くのであろう。

〔三九三〕

分譲地もう花つくる夢話す

(水 客)

少し生活が豊かになった。夫婦間で分譲

地を手に入れることが話題になった。「そしたら、ツタシ花をつくるわ。バラは四季に咲いて、とても奇麗ですものねえ」と、奥さんは、もう花をつくる夢を話すと云うのである。明るい家庭川柳だと云えよう。

〔三九四〕

琴の音がとまり出て来たお年寄り

(明 林)

ある静かな家を訪れた。琴の音がもれて、二タ声、三声。

「免ください」
と、二タ声、三声。
琴の音が、ビタリと止んだ。さぞ奇麗なお嬢さんが出て来られるものと、想像を歪ましくしているとき、

「どなた様です」

と、姿を見せられたのは、お年寄りだったと云うのである。最初は美しい情景を想わせ、あとでは予想を裏切られた老人の隠棲を詠んだところ、すこぶるロマンチックな句だ。

〔三九五〕

金持ちになつて人間小さくなり

(旅 風)

金が出来ても太ッ腹な人はホントの太ッ腹な人だ。多くの人は金がたまるほどケケケして、人間が小さくなるものだ。そこに人間の弱さがある。そこをつかんだのがこの句だが、穿ち以上には味わいを認められない。

〔三九六〕

本籍の土を踏まない子が五人

(ひろし)

その父と母が、郷里を捨てて、大都市に出たのか、それとも北海道のような開拓地に出かけたのか、そこまでは判らないが、フト振り返って見ると十年に近い歳月が流れていて、本籍地の土を踏んだことのない子が、もう五人も出来ていることを詠んだものである。そうした回顧の情が湧くのも、ようようにして生活が安定したことを物語っていると云えよう。一度郷里へ子どもたちを連れて行って、お父さんや、お母さんの育ったところを見せてやろうではないかと云う、夫婦の寝物語もささやかれることだろう。



最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと

ハンシンは
みなさまのデパートです

大阪梅田・水曜定休
阪神
電大阪361-1201(代)



川柳塔

豊中市 戸田古方

あの島のむこうで日本しまいな

この地図のここがこんなに引く裾野

西宮市 若本多久志

遮断機へ金策にゆく気のおせり

交際費にしとけと重役軽く云い

メニューひろげてやおらカレー一つ

高うついたマッチ二三日持ち歩き

商談はこっちのものと酌いでやり

大阪市 正本水客

朝顔のつるお隣りは子が居らず

旅好きと知っててくれる初対面

大阪府 西いわを

公立を受けるのでお稽古を止める

夕立の後は喧嘩の後みたい

青蛙考え事をする如ごと

お見合に父も出なきやならんのか

大阪市 北川春渠

夏バテへ原稿書け書け云うて来る

何不足なしに暮して夏を瘦せ

甲子園全国野球大会にて

エチケット袋へ広告抜け目なく

ワイマル 羽佐間柳葉

実力はないが時流にのし上り

人生も黄昏近い物忘れ

四世五世支那系同志支那語なり

堺市 吉田圭井堂

バンドルも朝令暮改でうろちよろし

台風のはしりに早稲もいためられ

防府市 長野井蛙

改装をしてから客足急に減り

魚屋にお伴の蠅が置き去られ

岡山県 直原七面山

人事異動の噂さが女秘書から出

“銀が泣いている” —と三吉の独り言

手術死の噂へ看護婦ひといる

鳥取市 河村日満

千円の泊り淋しい膳につき

中禅寺クシャミをさせる風が吹き

いろは坂嬉しがらせて又曲り

旅たのし裸踊りもしてみたり

豊中市 足立春雄

行くところが無うて城まで来てしま

自家用になつて遅刻の日が続き

親切は発車の前に一人のせ

ガム噛んで歯科の払いを思い出し

箕面市 安岡珊瑚枝郎

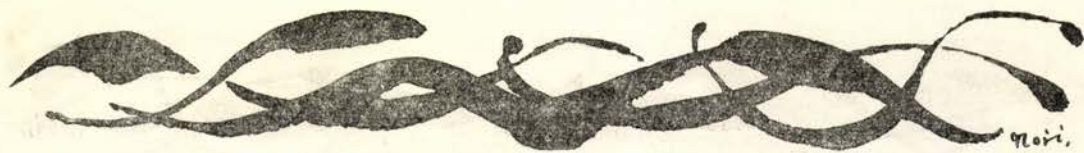
病人に見舞云われるてれくさ

名を売った軒も小さくなって病み

過去のことみな美しく見えて病み

倉敷市 木村千容

お手伝に追い廻されているみたい



律義者ここに居るともいわぬなり

加賀市 那谷 光郎

眼と耳と虚飾に疲れ切る団地

温泉へいったつもりでごろごろし

嫁が来て耐を二級に変えた父

料理屋も生徒と同じ優良可

大阪市 後藤 梅志

かかる世に活動写真と祖母は云う

奈良県 飯 降 白 香

しろうとの気楽さ厭になればやめ

露出過多痴漢にあらず痴女の夏

お冷めた逃げるバツを捉えたが

張り板のように腐らぬ板もあり

岡山市 浜田 久米雄

すきのない人と話してああしんど

米子市 小西 雄々

映画館足の持て行き場に困り

お手伝さんといわれて坊やの守りばかり

投資するように学資を子に送り

題名が思い出せない映画を出

さまざまに変わって空のひろいこと

夫よりお手伝さんに気を使い

責任は椅子に釘付けされたまま

常識でわからん絵画が賞とあり

健康な乳房がゆれる拭掃除

出雲市 尼 緑之助

奈良県 西 辻 竹 青

大阪市 山川 阿茶

口先きの友情腹を抉ぐるなり

退職をして夏やせを意識した

三輪の丁稚上りに道をあげ

末子の中学野球

親切は結局サギの小手しらべ

ビル建てる飯場のトタン雨が漏り

一点がとれず野球の夏終る

岡山県 福 島 鉄 児

泥棒に尾を振る犬で金が要り

宇宙飛行又成功

創価学会うちは不遇と見くびられ

飲む水に吞まれる人のいて淋し

モスコイの意気咳ばらいして放送

アンテナの立たぬは我家だけになり

チグハグの政策水につき当り

大阪市 水谷 竹荘

岡山市 服部 十九平

大阪市 金井 文秋

景色よりバスのゆれるが気にかかり

花むしろ敷いてパリーでする昼寝

客筋を見てバスガイド唄を変え

年下に惚れてへそくりまでとられ

ドンファン男嫌いの女史に賭け

すててこで店番我が家なればこそ

食堂車ビールの泡もともにゆれ

西宮市 若林 草右

グラマーの一人で足らぬ顔を持ち

東京都 山根 白星

古稀近くまだ生きる気の煙草やめ

皮切りに幹事の唄う黒田節

参院選挙

達磨の目入れて帰れば逮捕状

落選はしたが違反を待つ次点

高槻市 山田 季賛

父と来てマンガ立読みして帰る

割勘の紅一点は安くする

岡山県 田村 藤波

闇米にポストンバック酷使され

足ることを悟ってからの日が安し

気骨隆々社長手綱をしかと持ち

児島市 本田 恵二朗

パパのクロールはおぼれてるみたいよ

ステテコに腹巻浪花節が好き

夏ボケへ老眼鏡が見つからず

京都市 松川 杜的

脇毛気にして週刊誌はかどらず

にせものでよし大観の富士を愛す

鳥取市 森本法泉子

病棟のうちの部屋だけ灯がともり

夏物のタンス病院へききに行く

堺市 高崎 雄声

見ている電車も居眠り楽しそう

いつからか男の方が子を抱いて

島根県 藤井 明朗

会社での智恵者家では恐妻家

中元に犬裏口へ廻しとき

岡山県 永松 東岸

ステテコで医院の医者は脈をとり

ルームクーラーよりも和服の袂が涼し

飛びこんで泳いでみだし水源地

倉敷市 野田 素身郎

子供のプールで元海軍の息が切れ

特急電車別れの情緒もなく発車

東京の孫へ土産の兜虫

大阪市 伊達 堰子

夏山へ二人引越し程背負い

夜店の灯はずれて七味唐がらし

ドヤの窓月も暑さに焼け細り

唐津市 新岡 回天子

宿浴衣着れば愚妻も若う見え

旅かばん置いて我が家の良さをほめ

岡山県 池田 古心

言い訳は孫がせがんだ釣りと云い

大阪府 早川 清生

親捨てた鬻なく文士夫人肥え

六三制音楽ばかり強くなり

A B Cも読めぬ妻もち部下招はず

さいわいに醜男ピアノで名をあげる

大阪市 西田 柳宏子

夕涼み裸同士が垣根ごし

B Gの頬が焼けてる休みあけ

当選も落選もピラ放ったまま

堺市 辻 圭水





要領よくきぼれと見習教えられ

日焼けした方が交通事故にあい

大阪市 児島与呂志

つり出して車掌千円すかして見

岡山県 野々口美舟

あれこれと親の義務とか世話がやけ

電報の声細帯がころび出る

大阪市 橘高薫風子

宰相は天の声なるものも聞き

家へ帰れば襦袢も替える男だが

信号を待つ間も恋人らは喋り

鳥取県 田中蛙眠子

名刺まだ半分残して栄転し

割り切れば二号の座にもある光

神戸市 仲 どんたく

新聞と扉を半々デート待ち

定年の心にしみる蟬時雨

平田市 久家代仕男

純白な夢とはかくも脆かりき

アロハ着て歌舞伎見に行く柄でなし

高原の夏は昼寝に來たみたい

大阪市 本多柳志

政治的と云う切り札でけりをつけ

パチンコの手で夕立をたしかめる

新潟県 高野むじな

ニセ札もなし本物もない暮し

P.T.A以来出好きになつたらし

まんざらの馬鹿でもないか二種免許

大阪市 魚住満潮

続西成界わい

ポリ公が來たと七ツ八ツの子が逃げる

冷房車の中からここが釜ヶ崎

七月の直射刑事も染でない

鉢巻をしめて手配師十八九

コンクリートの触感真夏の夜の夢

文字と云えば将棋の駒が読めるだけ

天外の素顔と出会う西成区

愛媛県 村上旭童

西瓜食いに帰った筈じゃなかったに

すわっているのに冷房のある事務所

神戸市 傍島静馬

落書も天平時代は保護されて

ツイストの踊れそうな娘墓詣り

瓢瓢乎として巨漢馬鹿に見え

一人ぐらいあてにしている子沢山

大阪市 河井庸佑

人事院勧告物価釣り上げる

人事と思えば冷たいことも云え

子の頭親の望みと遠いすぎ

大阪府 谷沢好祐

朝寝坊するのも美容法とかや

帰省する費用分割とはゆかず

大阪府 高津徹也

坂道をのほりつめたる遠くの荷車



愛媛県 椋 紫 光

耕して儲らず値上りで儲け

分校のプールは蟬の声に明け

金魚だけ一家心中へ生き残り

大阪市 今 西 生 薑

猫あわれ卓の金魚の下で寝る

腹上死というを本妻ひたかくし

折伏（しゃくふく）へとうとう帰きまがらち

美禰市 安平次 弘道

一日一善癡ってない肩叩かれる

特許申請老後の花を咲かせたい

夏やせを娘心はうれしがり

青森市 工 藤 甲 吉

女大臣今度は防衛庁長官

殺虫剤かやの風情まで殺し

算術が悲しくなりぬ月給日

京都府 室 井 八 九 寸

謙遜と思われ断わるのに困り

人間失格金ばかりためている

あの煙り一億円を焼くバナナ

宇部市 平 田 実 男

ジタバタジタバタ一生を終りたる

中絶の帰り映画で笑いこけ

また邪魔な花束かと云う顔で受け

役人という水心知った人

デパートの夏に冬買うおおしんど

文豪のこれも新カナ知らぬらし

なに一つ不自由もなく万引し

碧い眼も混じる京都の縄のれん

ミスの時ほどにちやほやしてくれず

松江市 小林 孤 呂 二

岡山県 横 山 一 声

大和郡山市 中 内 孚 彦

夏菊よお前も痩せてる俺に似て

盆踊り好き合う二人はおどらない

東大出を鼻にかけてるバカ談義

豊中市 林 夢 虹

やけ酒へサービスをして叱られる

諫早市 川 岡 靈 眼 子

ヒューマニスト達よキリストは死んだのだ

小松市 関 戸 宗 太 郎

飾りなき言葉がいつも嫌われる

婿婦の涙を珠にしたキリスト

市役所に冷房完備と書いてなし

近寄らぬ味方もあって面白し

情熱の一夜が明けた水仕事

ステレオは新曲町費は滞納し

貝塚市 杉 本 一 鶴

西宮市 山 本 一 傘

野次馬へ仕掛花火のような火事

盆踊り遠くに聞いて月と寝る

家康の例もあるからあせらない

石川県 高 山 涼 髪

おろかな心を聖書にくだかれる



富田林市 浅川 八郎

大ボスも水の向けようで他愛なく
盃へ長寿の弁の他愛なく

岸和田市 内藤 きさ子

交通禍つばめの速ささえ憎し
体重を貫目にせねば気が済まず

箸おいて仔犬探しに行つたまま

クリナーに吸われて終る夏の虫

耳かきを横で待ってるせわしなさ

同
舟
近
詠

大阪市 橋 本 緑 雨

あんまりなことで老人口を出す

三朝温泉

聞きあきた河鹿に一浴して眠り

浜村温泉

浜焼の鯛冷房バスの棚でゆれ

東京都 阿部 佐保 蘭

無心庵にて

せせらぎもテープに入れる無心庵

今入れた声を聞いている無心庵

草むしりして無心庵さようなら

長野県 高峰 柳 児

飲けるのがだんだん汚職に引ずられ

敗戦のどきくさ築いた立志伝

実力者飼ってる数に物言わせ

和歌山市 秋 月 宏 方

出世頭たかが職長とは淋し

花火売る小度も夏の風物詩

安定研コンマ以下ですとも云えず

蟬の暑さを謳歌する如し

大洲市 米 沢 暁 明

逢うだけの約束でよし借電話

おしかけた程は買わない土産品

国境を越えて壮拳は讃えられ

P T A 子供の顔も立てる寄附

松山市 月 原 宵 明

ネックレス三重にして観世音

アイデアは良いがと採用してくれず

税務署の交渉きれいな妻にさせ

西成に住んで英語の読める人

病人の眼に看護婦の線熟し

宿直の電話は机の上に脚

ああ葉光さん

夢はもう懲得もなく仏さま

名古屋市長谷川 鮮 山

遠縁に当る名士の写真帖

心臓の良さ先輩をあきれさせ



吉川英治と川柳

—川柳の英訳にも関心をもっていた

阿部佐保蘭

吉川英治先生の長近を大船のいとこの家で知り愕然とした。毎日の夕刊を克明に手帖に写したが、婦りに駅の売店でその日の夕刊を毎日、朝日、日経、サンケイ、内外タイムスと五部買い婦りの車中でむさぼるように読んだ夫人と石川博士の対談のくだりで涙が出て来て、眼鏡が曇ってあとが読めなくて困った。帰宅してうちでとっている読売と東京に眼を通し、全部の中で徳川夢声の「スンコウもなし」と阿部真之助の「苦勞をみがいた人」と今東光の「歴史文学に新境地」の三つにいたく感銘を覚えた。とにかくこの新聞も先生の偉業を筆を揃えて褒めてい

た。先生の命をかけた御仕事が一度に日本中に開花したとでも云うのであるうか。私は先生に一度も逢ったことがない。古い「きやり」で矢野錦浪先生等と一緒に旅行された記事の載っていたのを憶い出す。

貧乏もあまりの果は笑いあい 雉子郎

先生は川柳の雅号を雉子郎と云われ

明治大正時代に活躍された。先生のお物は伸びた「そば」だと聞いている。

前夫人との貧乏暮しの中に伸びたそばをこよなく愛された先生の風貌が眼前にほうふつする。あの人なつっこい眼

が初めて遇った人まで完全にひきつけて了う。生れ乍らの通俗作家とでも云

うのであろうか。七十才と云えば古来稀と昔は云ったものである。僕なんかそこ迄生きられるかどうか分らないのであるが、雀郎先生と共に百才はおろかそれ以上迄生きていて貰いたかったお人である。芭蕉は晩年に川柳に近い俳句を作られたが、先生のはその逆でしよっぱなから川柳にとり組まれた。

いつか鶯山から聞いた話であるが、周魚先生が鯛坊と云われた頃、五十銭玉を手にすると鯛坊、花酔等と吉原土手

で白馬(泡盛のこと)をひっかけ、その勢で仲(仲は吉原仲の町)へくりこみ

引手茶屋の二階で川柳の句会を開かれたそうである。その晩天の句を作った

者が、お職を抱いたと云う逸話がある
初会客名前は荒木又右衛門 雉子郎
こんな句の生れたのもその頃の事である。先生は川柳をこよなく愛されたその証拠に次の日の読売朝刊に「吉川氏をささえた愛の献身」と云う見出しで「がんばりましょうね」文子夫人、つききりの十一月と云う中の見出しの記事の中にこんなことがのっている「大みそかに退院して自宅で正月を迎えた吉川さんは、年始に訪れた若い知人に「元日やことしもどうぞ女房どの」の句と「わが古女房へは年々この句をたてまつるをもって吉例とする」の説明を色紙に書いて与えたほどだった。心から楽しそうで元氣であった——中略——とある。嬉しい話ではないか

私はこの記事に朱筆で傍線をつけて快哉を叫んだ。この十二日が先生の告別式である。私はこの告別式に何をいっても出席するつもりである。一風呂浴びて齋戒沐浴。新しい筆を買って来て白の色紙に私は次のように誌した。

悼 吉川英治先生長逝

昭和三十七年九月七日

元日やことしもうぞ女房どの

吉例の川柳残し巨匠近く

川柳後進 阿部佐保閣

先生の告別式には周魚先生も花又花
酔先生もお見えになることと思う。先
生達の感懐又一しおなるものが今から
想像される。とにかく惜しい方を亡く
したものである。

先生は川柳をこよなく愛された。そ
の証拠に、先生は川柳の英訳にすく
関心をもたれた。小学校もろくに出て
いなかったと云う先生が、英訳に関心
をもたれたのはどう云う訳か、川柳齋
訳研究会を起して、"SHK"と云う
機関誌迄出していたその当時の僕には
解せなかった。その当時柳界に話題を
まいた川柳の英訳をとりあげて先生は
番傘の例会で講演をされ

これ小判たった一晚ひてくれろ

古川柳

この句が英訳されて果して外人に解
るだろうかと講演された。その当時若
かった僕は自分の立場もあり「吉川英
治と英訳川柳」と題してSHK誌上に
先生と論戦をはり先生の英訳に対する
無理解を難詰したものである。

今にして思えば冷汗ものだが、その

当時まだ三十台だった僕にはどうして
も、その無理解が許せなかった。先生
は高松宮様に英語を御進講された明大
教授宮森麻太郎先生の訳された川柳の
英訳を御覧になったかどうか分らない
ので僕は「吉川英治と川柳の英訳」な
る一文の末尾にその英訳されたものを
発表し、こう云う風に訳されているが

これだけでは外人に解らないだろうか
ら、これに解説を加え、出来れば一流
漫画家の絵をそえ、原文をローマ字で
書き、これを川柳家が朗読したテーブ
を添え、英訳川柳もさしずめ堀英四
郎先生(元慶大教授)辺りに吹込んで
戴いたテーブをそえればほぼ原句が解
って貰えるのではないかと云う意味の
ことを力説したように憶えている。終

生敵を作らなかつた先生はお忙しい故

もありこの僕の反論には終に触れられ

なかつたが、とにかく他の柳人が一笑

に付していた川柳の英訳を番傘の例会

でとりあげ講演されただけでも有難い

と思つている。この講演は速記され番

傘誌上に発表された。路郎先生は我が

齋訳川柳会の顧問でおられる。つとに

小生のこの事業に関心を寄せられ三十

年近い年月蔭にひなたに霞乃女史と共
に小生を激励された。この御恩は一生
忘れない。最後に吉川先生に川柳齋訳
研究会として先生が一番関心をよせと
りあげられた古川柳の「これ小判た
つ一晚ひてくれろ」の句を解説付で英
訳されその著 "Senryu" Japanese

Satirical Verses Translated

and Explained by K. H. Blyth

の中に発表され現在皇太子殿下と美智
子さんに川柳の英訳を御進講なすつて
いるアール・エッチ・ブライス教授(学
習院大学)の名英訳を御霊前に捧げて
先生の御冥福を祈らせて戴くことにし
ます。

これ小判たった一晚ひてくれろ

古川柳

Kore Koban

Tatta Hitoban

Itekurero.

Ah, Koban,

If only you would stay

with me Even one night

A koban was a gold coin
of some value. Whenever he
received one, which was
rarely, he had to use it at
once to pay the rice mer
chant or the tax-collector.
He would like to have been
able to keep one in his
possession for just one day.
Translated and Explained
by R. H. Blyth

(一九六二年九月十日誌之)

合掌

色紙短冊
書画用 上品

大坂戎屋

丹精堂

大阪 西川町



ホルモン

中島生々庵

て居ります。

各臓器がそれぞれ特有なホルモンを出し、而も一つでなく、二つも三つも或は五つも六つも違ったホルモンを出して居る場合もあります。先きに述べましたように、生物体全体が正常な働きを営むために各臓器とか組織とかは互に連絡協調を保って居るのであります。交感神経とか副交感神経とかで調節するものを神経性調節と呼ばれるに對しホルモン調節と呼ばれて居ります。

体の外界が、気温の高い時には汗を出して熱を発散させるし、寒い時には皮膚の血管が収縮して熱の失われるのを防ぐと云った外に外傷とか、精神的刺激とか云う刺激を受けた場合、そうした刺激が中枢に達し、交感神経を通じて副腎髓質に働きかけてホルモンが分泌される。その外更らに重大なのは脳下垂体に作用して、脳下垂体から種々のホルモンが出る。そのホルモンが副腎皮質を刺激して副腎皮質からホルモンを分泌し、さらにこの副腎ホルモンが全身の各臓器に作用して適応的体制をととのえたと云うわけでありませう。この様な体内のホルモン系に起る反

応をストレス又は「防衛反応」と呼ばれます。この反応がうまくゆかない時にいろいろの病気が起ると云うのです。カナダのセリエ教授のストレス学説と云うのがこれです。セリエ教授の学説によると先きに述べた外傷とか、寒熱とか精神的刺激とか云う非常刺激が加わっても、脳下垂体、副腎皮質系の分泌活動が正常であれば、病気は起らないが、このホルモン系に異常が起り、ホルモン分泌に不均衡が生じると病気があらわれて来ると云うのです。

この働きは肉体的ばかりでなく精神的にも同様に働くのであるから、身体的の病変が精神的苦痛を与え、精神的苦痛が身体的病変を進めることとなると云うのです。従つてこのストレスと云う学説から云うと病気と云うものは、生体と、外界の環境との関係から生れてくるものであり、多くの場合現代社会のこの複雑な生活がその原因になって居ると云うのです。そうとすれば現代生活と云うものが文化的に改善されて行けば行く程新しい病気を作り出して行くこと云うわけでありませう。そして病気と医学の進歩とは永久に平行線と

ホルモンと云う言葉は、殆どあらゆる階層の人達の間にもゆきわたった通俗語となつて終つた感じでは、丁度、文化と云う言葉が、文化様、文化住宅、文化コンロと云つた工合に使われたのと同様であります。そして又文化と同じように、ホルモンとは何かと開きなおられて簡単に説明する事は一寸難しい問題です。それは、それ程に複雑で、微妙で、深刻な内容を持つ科学であるからです。勿論ホルモンと云う定義は、文化と云う抽象的なものに比べると、相当具体的に表現されては居ります。即ち内分泌腺から分泌されたものが、血液内淋巴液に入り体の中を循環して行つていろいろな臓器の働きに化学的な影響を与え、互に

働き合つて生体の正常な機能が営まれるものである、と云うのがホルモン大体の定義でありませう。HORMONEと云うギリシヤ語の意味から云うと、「呼びさます」とか「刺激する」とか云う意味がありますが必ずしも刺激したり、呼びさましたりする役目ばかりでなく麻痺させる働きを現すこともあります。従つてその影響を与える度合とか、態度とかに難かしい学問的な複雑さがあるわけでありませう。そんな難かしいことは私も余り知りませせんし、皆様には必要のないことだと存じます。ただホルモンと云うと、現在通俗化された言葉の意味から、たとえば男性ホルモンとか、女性ホルモンとか、ホルモン料理とか云う言葉

から、セックスに関係ある性ホルモンの事ばかりのように取つて貰つては大変な間違いであることを申添えておきます。ホルモンにはいろいろな種類があつて、それぞれ独特な生理的作用をもつて居るのです。主なものを挙げると次のようになります。

脳下垂体(後葉)

(前葉)

(中葉)

副腎

髓質ホルモン

甲狀腺

皮質ホルモン

睪腺ホルモン

睾丸ホルモン

生殖腺

卵巢ホルモン

その外に唾腺、胸腺、肝臓、胃腸などもホルモンを出すと云われ

云うことにもなるのであります。

昔は病気を治すのに心臓の病気を、各臓器別の病気に分けて、薬も心臓の薬、肝臓の薬、腎臓の薬と云うわけでありました。ところが、体の中の臓器とか組織とかは互に結びついて働いて居り、而もその肉体の外に精神と云うものの密接不可分な働きを持って居ることを忘れてはなりません。

セックスの問題でも、性ホルモンが中心であることは間違いないとして、それでは性欲の減退した場合性ホルモンを体内に与えたらその減退を取り戻すことが出来るかと云うとそうはいかぬのであります。一時は華やかな脚光をあびて登場したいろいろの学説や実験が水の泡の様に消え去って行った事は皆様に御承知の通りであり、

ブロンンセカール（バリ）、シユタインナハ（ウイーン）等学者の名前も御記憶にあることと思えます。勿論暫らくは効き目があるかも知れませんが結局は駄目であると云うのが今日の結論であります。その理由は性ホルモンの働きの外に大脳にある性欲中枢と云うものが存在して居て、この中枢がいろいろ

ような条件で興奮したり鎮まったりする作用を持ち、性ホルモンと殆ど半々の割合で働きを示して居るからであります。この大脳に存在する中枢と云うものは、精神的にも肉体的にも中壮年以後になると社会的生活状態の複雑さに影響されて弱まって来る。即ち精神的の面で減弱して来て、脳下垂体の働きが弱まって来て、精力は十分でなくなつて来ると云うわけでありませぬ。言い換えますと精力減退と云うものの原因が性ホルモンの不足と云う丈ではないと云う事を知るべきであります。その辺のところが理解するには次のことを知れば容易であります。

脳下垂体がいろいろな条件の刺激——たとえばキレイなものを見るとか、面白い本を読むとか、興味深い映画を見るとかの刺激を受けると、その影響で脳下垂体からホルモンが生じ、それが丸丸なり卵巣を刺激すると、そこから性ホルモンが出来て来る。ところが神様のおはからいは実に巧妙に出来て居るものでありますして、脳下垂体が刺激された云うのでなんほども無限に性ホルモンが出来ては大変である。そこで一たん出来た性

ホルモンは逆に脳下垂体の働きを押える働きを持つと云う仕掛けになって居るのです。このようなホルモンの働き合いと云うものを頭に入れずに、無闇に注射をつづけて行つたらどうなるか。体内に過剰になった性ホルモンが脳下垂体の働きを停止せしむることになり、脳下垂体の働きがストップするから、卵巣や卵巣から出来る性ホルモンもストップする。即ち考えのない誤つた注射をすればする程機能を障害し、最後には全然キカスことになって終う恐れさえあるのです。ホルモンの使い方は大変難しいものである事、そして専門の医師に充分相談してやらねば危険きわまるものであることを知るべきであります。

結論とすれば精神的に脳下垂体が健全でホルモンを出して居れば健全でホルモンは自然に出来て来る。従つて気分を若々しく、くよくよせず常にゆたかに保ち、一方肉体的にはいつもこまめに自分の職域に働いて居ればそれが一番いいことになること云うわけでありませぬ。

（本社九月旬の物語から）

續
川柳書架
(24)

川柳雑話

(村田問魚著)

★巻頭に、誰にでも解り易く、ということを目標にして書いたと述べた著者の序がある。

★目次概要 川柳とは何か・川柳の新しい命・時事川柳について・川柳眼・再び時事川柳に就て・諷刺詩・運命の食堂・川柳の外來語

12・問題と答案12・日露役と新川柳・交通機関と江戸川柳・汽車の窓・川柳北海道・川の川柳を選む・作家の史眼・現代句会風景・庶民の中で栄えた川柳・地黄・忍冬・山婦米・秀作再考・言葉の発見・觀光静岡。

★昭和三十年五月十五日発行、B6版、二三三頁。価二五〇円。発行所東京都豊島区高田本町二丁目一四五九番地川柳きやり吟社

★著者は柳界の長老で、川柳きやり吟社の主宰。

川柳忠臣蔵

(古川風竹著)

★巻頭に高沢一浪、前山北海の序

がある。
★著者の「前がき」の一部を抜萃すると、「私は少年時代からどうしたものか赤穂義士に興味をもち忠臣蔵の芝居、浪曲、講談のファンであった。本では古い「仮名手本忠臣蔵」「いろは文庫」その他近代の単行本も就読した。」と云う著者が興味本位に四十七句を作り、漫画を配し、短文を添えたもの、漫画は古川アキヲ氏の筆。

★発行日はないが、序文に二千六百年初秋とあるので、その後に出たものである。B6版横綴、ページ数を打っていない。巻末に非売品。著者古川茂生、画古川章、印刷日布時事社。布哇ホノルル市郵函一二三〇とある。発行所はないが著者の自費出版であることは間違いない。

富士筑波

(大野琴莊著)

★著者はハワイの草分けの川柳家
★本書は故大野琴莊の句集で、昭和五年から昭和十五年の作品が収められ、後半に随筆三編が掲載されている。

★巻首には故前田雀郎、村田問魚氏の序がある。

★昭和三十三年十月八日発行。B6版、一五八頁。非売品。編集者塚越迷亭、発行所東京都中央区区形町三ノ四川柳長屋連。

伴睦という名の川柳人



(大野伴睦氏)

東野大八

ここに大野伴睦という政治家がいる。トラ歳で七十三歳、現自民党副総裁。過去幾度か大臣ともなり三日だけが衆議院議長のイスにもついた。

宇宙船がアベックで地球を何日間もブラつき、月世界に簡易住宅でも出来そうな時代に、人呼んでナニワ節といい、義理人情の張り扇の大將という。さわさりながらそれにてまだ、やれ実力者だの、党内師団長の一角だのと大モノでまかり通っている。大宅壮一あたりにいわせると「けだし、時代に逆行した愛すべき珍物」とよび、古川隆元もかくいう「古きよき時代の党人を代表する最後の人」と縁あって僕は、若いときからこの人と公私ともに顔をつき合わせる時間が多かった。彼の選挙区岐阜県の地方新聞編集局のめしを食

っているからに他ならぬのだが、この間柄だからこそ言いたいこともいわれにくべきときには承けたまわされる立場をとらなければならなかった。

とにかく、この伴睦（通称われわれの間では「伴ちゃん」という）なる政治家は、政治そのものの手際、実績というより、その一個の人間性として僕は僕なりの敬意をよせている。

十何年前だが、岐阜の盛り場でバチンコをやっている彼をみつけた僕は、早速カメヲを呼びよせ終って彼の宿舎に押しかけ、単独会見といえは大きだが、とにかくし向いで一ぱい飲んだ。当時彼は何かの大任職についていた。

「バチンコは入りますか」

「なあに、五十円だよ、一回も入りません。この前来たときはタ

バコを三つとった。新生だから百二十円だな。もてが五十円だから七十円儲かった。こんなときのタバコはうまいぜ」と白い眉をビクつかせてごきげんだった。

彼は老齢の今でもピースを日に六十本吸う。しかし先っぽだけだから正味はその半分だ。そのさしで向い合ったときも、たちまちタバコ益に長いのが針鼠みたいにになった。僕は勿体ないからそれをとっては吸う。それを微笑して眺めていた彼はこんなことをいい出した。

「大正二年の護憲運動でわしは市ヶ谷の未決に四十五日はうりこまれた。その時の典獄に木名瀬というのがいてね、わしを調べる際にはわざと吸いさしのタバコを置いて便所に行った。留守中これを

吸えというナンだな。感激したなそんなタバコは例外なくうまい。三、四年してその典獄が死んだと聞いて金五円也を香典に包んだ。おかげで女郎買いを五、六回辛抱したがっらかったね」

香典といえはこんな話もある。昭和二十九年頃、北海道開発庁長官で、北海道初視察に出かけた大野國務相の一行が、旭川から南へ約四十キロという富良野という町に泊った。面食ったのはその地元の町長などで、とりあえず道庁のおレキレキも加えてその町で歓迎会が催された。その歓迎宴の床の間に大野國務相と並んで一人のおばあさんがチョコナンと坐っている。開会すると大臣が老婆を一同に紹介した。

「このお婆さんは、わしが幼少のみぎり、この背におぶってわしをお守りしてくれた人だ。この小さい背中にはわしは幾度小便をひっかけ、この小さい頭を幾度ひきむったことか、この人がここにいることを知っていたので、北海道へくるときどんなにうれしかったか、この町にご迷惑をおかけするものも一重にこの人にあいたいばかりからだった」

おばあさんの名は片桐カネ。大野さんの子守を何年かして亭主の大工と渡道、この富良野に住みつけたというわけだ。

「伴（トモ）さんもエラうなっ

て……」
紹介されたあとぼつんとこういつたきりでトモさんは涙をこぼした。

この日を一期の思い出として半歳後カネさんが乳ガンで死んだ。二月選挙の多忙な中で、大野さん自らが筆をとって弔文をかき、多額の香典を送った。カネさんの墓は、その墓地の中でも一きわ高く立派で今もあたりをハイゲイしているそうである。

カネさんにおんぶされていたころの伴睦は、トモさんすなわちトモチカで育った。名付親は神主をしていた祖父で、いかにも神道向きである。父親は直太郎、彼の出身地谷村村長（現美山村）だ。祖父の神道ばりのしつくと、当時の村長らしい村民一家の主旨から田舎の「義理」が数般とんになり「人情」がかけぶとんになって彼は育った。

「不肖バンボク、国家存亡の機至らば身命を捧げて悔いず」とは彼のおはこだが、この字句論旨はこうした育ちによるらしい。十八の時に上京したものの、明大に籍だけを置いて酒と女にあけくれたため放校になり、おまけにオコリにとりつかれ腹抜け同様になった。

「母が迎えにきてくれたが、一眼みるなりこのタワケと叱りとはされた。この母の作ってくれた着

物はみんな質屋で、その金は吉原と電気プランに消えてしまふた。寝ずの看病を母からうけてどうやらようになったが、その折、質屋へ母を案内して入れた着物を全部出してもらった」

万木という俳句は、この病気で郷里へ一旦帰国したころに芽生えたものという。

「小説家か田舎新聞の記者にでもなろうかと考えていたときある日金比羅利生記を読んで一念発起したね。この利生記が今日のわしを作ったようなものだ」

先日NHKのテレビでこの話をしていたが、タバコはとにかく今でも酒好きで、二升酒をのむと席上放言していたがこれはマユツバである。今はいいとこ二合だ

イザリになって利生記に感奮、再度上京して院外団となり、原敬の書生で東京市議に立ったとき「トモチカなんて新派の役者みたいだ。爾後バンボクと改めろ」と原敬にいわれ、今日におよんだという次第だが、新派というのは若き日の伴睦という友達がいたせいでこの悪友が質屋と酒と女を彼に仕込んだのだ。

「不首バンボク、わが生涯の思い出に残る人は亡き母と原先生とこの悪友だ」

とよく述懐するように、彼の人間性はこの一語につきているようだ

僕がこんな人がらもあって万木俳句を月並と評した末、川柳をおやりになれば俳句よりもっと有名になれたでしょうに惜しいことをしました、といったことがある。そのとき、真赤な鼻を一段と赤くして

「一度万木との俳号をつけたわしだ、なんで心やすく別口にかわれと思うか」

と真顔でニラミつけられた。

彼はごきげんだと平然とワイ談をやる。しかも枯淡でうまいものだ。「人間の人格というものはへんから上のもんだ」という名セリフも出てくるし「人間の産みの親は女だ、その女が男の人生を慰め、そして男の後つぎを生んでくれる、大事にせにや人倫にもとる」なぞという。

つじつまの合わぬ現政界にこんな人物がハバを利かしていくれるということは楽しい。金具だらけのA級デザートで番茶にめぐり合ったようなものだ。

大野伴睦とはその人となりからして川柳人で、ただ単に俳句をひねくっているにすぎない。

川柳味

直原七面山

著名な作家N氏がある柳誌に一文を寄せられ、俳誌「炎昼」に発

表されている。

輪がとまり踊りがとまる目鼻だち

土工屋敷地下足袋の底空に向け乳くさき汗くさき子を抱き上げるの三句をとらえてこれを川柳であるとし、また里雪という有名な俳句家の句碑に刻まれている、

掌に颯を鳴かせて子供来るといふ句も明らかに川柳であると論断され、将来俳句がだんだん川柳化して来て、俳句という名のもとに川柳を作る作家が数多く輩出して来るから、こうした作家を川柳界に吸収して柳界の膨張を計るべきだ。

また柳界は今までのように徒らにその純粋性を主張しないで、「十七音みな川柳なり」との見解のもとに、大きく門戸を開放すべきだと主張せられ、しかも、自分自身の選句標準を「簡潔、含蓄詩趣」の三点においておりこの基準にかなっておれば、例えその句が、俳句風であろうが、標語的であろうが、狂句風であろうが一切かまわず川柳として扱われていると説かれ、今後どしどし生れて来る新しい俳句作家を残らず川柳界に迎え入れて、「短詩即川柳」といわしめたいと大いに意のあるところを披れきされておられます。

N氏は長い柳歴をお持ちの作家であるとともに、私達の敬愛する大先輩で、四国地方における第

一級の老練な指導者であり、その言動の影響もまた大きいと思われるので、私はこの一文を特に興味深く読ませて頂いたのであります。

が私は、読んでみて実は、「はてな」と首をかき上げざるを得なかったのであります。

氏の主張は確かに一理あり老練な作家の一見識であるようではあります。が、どうも私には、どこかに思い違い、考え違いがあるのではないかと思われるのであります。まず第一に考えてみなければならぬのは、氏が挙げられた四つの句が果たして氏の主張されるように川柳であるのだろうかという問題であります。

いろいろと考えても見たのですが、私にはどうしてもこれらの句の中に「川柳味」を見出すことは出来ませんでした。

なる程氏は、「簡潔、含蓄、詩趣」に合っておれば俳句風も、標語的も、狂句風もいとわぬとは申しておられるのであります。が、これはあくまでも「句」自体がその奥底に「川柳味」を持っていることであって、含蓄があれば詩趣があれば、なんでも良いと言う訳のものでもありません。

四句はどうみても明らかに川柳ではなく、典型的な俳句であります。

氏はまた、「川柳の純粋性を排

せよ」と述べておられるのであります。が、これにも私は賛成し兼ねます。

これが「純粋に選れ」というのでしたら話も判るのですが。

従って氏のおっしゃる「十七音みな川柳」の御主張もうなずけず無論大きく門戸を開放してなんでもかんでも受け入れる主義に追従することも出来ません。

門戸を開放しさえすれば川柳は発展するのと言えれば決してそんな簡単なものではありません。

かえって川柳の純粋性を追求するところにこそ佳句名吟も生れ出て初めて川柳の向上発展が期せられるのではないのでしょうか。

私達はかたくそう信じているのであります。

とにかく、川柳発展の問題は現代作家に課せられた重大な使命であるとともに至上命令でもあります。

最良の道を見出すためには論議も重ね時日も要しかつまた困難も伴うことであります。

がしかし、だからといって私達にこれにそっぽを向いてとおりすぎで行けるかと言えればそれは到底不可能なことであります。

なぜなら、川柳が詩であり、文学であり、芸術である以上当然歩まなければならぬ宿命なのだから。



作家以前

吉川さんを偲んで

麻生路郎

明治末葉のことである。

東京の柳界に喜音家古蝶、平瀬萬雄、吉川雉子郎と云う巧い柳人がいた。この雉子郎が後の大衆作家吉川英治であることは一般には知られていない。

それが証拠には吉川英治が横浜版工と賑々として苦学したことは書いても、彼の文学熱が、苦労を母胎として川柳に芽生えたことは誰も書こうとしない。大衆作家以前の彼はすぐれた川柳作家だった。

彼が原稿料らしい原稿料をとったのは講談倶楽部の懸賞募集に際し、落語の一等に当選、金五拾円也を手にしたのがはじめてであるそのころの五十円と云えばサラリーマンの二カ月分の給料であった

川柳では金にならぬが、講談や落

語を書けば少しは小遣いになるうと、食指が動いているのを見てとった川柳人の矢野錦浪が、雉子郎の落語の当選を機に、講談社へ売込んだのであった。これは錦浪から直接聞いた話だから間違いはないだろう。

矢野錦浪と云っても知らぬ人が多いが、後年谷孫六のペンネームで当時のベストセラーであった「岡辰押切帖」の著者だと云えばウムあれかと昭和の読書子なら、大ていの方はうなずいてくれるだろう。

その矢野錦浪が、東京毎夕新聞の支配人だった関係で、多くの川柳人がこの社に集ったのも理由のないことではない。剣門の故近藤船坊をはじめとして、川上三太

郎外二十数人位はいたようだが名前は忘れた。漫画家の宮尾しげもいた。大ていは剣花坊の門下だった。船坊も雉子郎も三太郎も

剣門だった。その当時柳界では剣花坊の柳樽寺派が、今日の自由党のように巾を利かしていた。しかしライバルの久良岐派（後に久良伎）にはインテリが多かった。剣花坊は日本新聞の柳壇を、久良岐は電報新聞の柳壇を担当していた。

雉子郎の吉川英治の大衆文学がソロソロ売れ出し、先生の剣花坊よりみいりがよくなり、剣花坊の世話で土地を手に入れたと云う噂が立ったが、その頃にはもう雉子郎の句は柳誌には見られなかった。大衆文学に脂が乗るとともに忙しくなり、川柳を作るひまなどはなかったものと云っていいだろう。柳壇から云えば大きな鯨を太平洋へ逃がしたようなものだった。文化勲章にまで漕ぎつけた吉川英治には文句の云いようもない

★前号の拙稿「川柳名句と難句」で、都山流の解説をした際、流祖中尾都山の死亡年月が不明だったので、自分の記憶をたどって、昨年から、一昨年に亡くなられたように書いておいた。

★ところが、松川杜的君から都山師が亡くなられたのは七年前で、この十月七日に、七月七日に、七

不確定の記憶

路郎生

一社的君に一

★雑誌刊行に携っていると、縮切の際の原稿だったので、亡くなられた日を調べる余裕が無く、大たいの記事には関係がなかったの

★雑誌刊行に携っていると

★その頃は支関が舊古所だった。

★私は高商予科にいたころのこと

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

★私は、赤電話のようなものの解

の応答について、更に文獻を見せてもらわないと執筆しないことにしている。それなのに、大たいの解説には関係がないとしても、あつた。他日単行本にでもする時には死亡年月をよく調べて訂正したいと思っている。

★あの解説には都山師と私との個人的な関係については省略しておいたが、実は私は都山師の古い弟子で、明治三十七、八年頃だった

★都山師が旧難波橋筋の今橋を西へ這入った南側（北側は鴻池邸

★東郷りは鴻池銀行）で尺八指南を

★大げさに云えば、いささか前歯が

★飛び出し、右親指のかがつこうが変

★型になったほど吹きまくったもの

★である。

★その頃は支関が舊古所だった。

★まだ譜本が発行されていなかった

★ので、習うだけずつ、師が半紙に

★譜を書いて渡されたものだ。譜が

★少しずつ溜ってゆくのが、習う方

★にとっては、とても魅力だった。

★その頃支関番をしていた上田と云

★う少年が、後年上田流の流祖とな

★ったのである。

し、フレーフレー吉川と、彼の成

功を祝福するより手がなかった。

私が吉川英治の作品を一つも読んでいないと云えば嘘のようだが、吉川英治の作品だけでなく、終戦以後、イヤもつと以前から日本の小説は既読しないことにしている（二三の例外はあるが、それは何かの参考のために、読んだので恥ろうと、

「吉川さんの句に「元日や今年もどうぞ女房どの」というすばらしい句があります。吉川さんという人は大変な苦勞人で、その苦勞たるや学問的にも、人間的にもありとあらゆるものを含んでの苦勞でありまして、この名句に見られるように、最も女性を知っている作家だと思ふのです。」（以下略）

「親鸞」や「宮本武蔵」や「新平家物語」「私本太平記」ぐらいは読みたいと思つているが、いまの忙しさでは、それもいつ果たせるか判つたものではない。今はただ在りし日の雉子郎を偲び―その延長として大成した吉川英治の計を

うに、私は私の道をまっしぐらに行っているので、彼の作品をのぞき見るひまがなかったと云えば判りがいいだろう。今東光氏が「吉川さんと私」を朝日に書いて、弔意を表された言葉の中から、少しく拝借させても

「吉川さんの句に「元日や今年もどうぞ女房どの」というすばらしい句があります。吉川さんという人は大変な苦勞人で、その苦勞たるや学問的にも、人間的にもありとあらゆるものを含んでの苦勞でありまして、この名句に見られるように、最も女性を知っている作家だと思ふのです。」（以下略）

「吉川さんの句に「元日や今年もどうぞ女房どの」というすばらしい句があります。吉川さんという人は大変な苦勞人で、その苦勞たるや学問的にも、人間的にもありとあらゆるものを含んでの苦勞でありまして、この名句に見られるように、最も女性を知っている作家だと思ふのです。」（以下略）

「吉川さんの句に「元日や今年もどうぞ女房どの」というすばらしい句があります。吉川さんという人は大変な苦勞人で、その苦勞たるや学問的にも、人間的にもありとあらゆるものを含んでの苦勞でありまして、この名句に見られるように、最も女性を知っている作家だと思ふのです。」（以下略）

「吉川さんの句に「元日や今年もどうぞ女房どの」というすばらしい句があります。吉川さんという人は大変な苦勞人で、その苦勞たるや学問的にも、人間的にもありとあらゆるものを含んでの苦勞でありまして、この名句に見られるように、最も女性を知っている作家だと思ふのです。」（以下略）

飛燕往来

岩崎愛二氏より（片註）

わたしの若い日に夏休みを暮らした軽井沢に來ました。

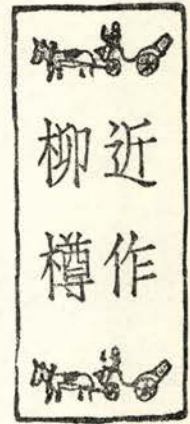
十九の愛二が

草津伊香保格名を廻つて歸ります。お元気で 九月三日

阿部佐保蘭氏より（片註）

愚妻同伴善光寺へ参詣、その足で湯田中温泉丁子屋旅館へ落ち着く。「丁子屋が丁子屋へ来た嬉しい日」宿から紫痴郎先生へ電話、宿の夕食を断つて我忘園へ二十二年ぶりに訪れる。八十一才と思われぬ御姿に接して感懐無量である。無心庵でビールを満をひく。これは愚乃女史に書いて貰つた色紙だと、「加露にも今日を限りの無心庵」の句を見せて下さる。先生の滋味尽きる所なき川柳十三句を解説を交えて低音で星川十三句らぎの中にテープに入れて下さる句碑になった「流れ行く水の素直さ」と見る」などの句を色紙や短冊に、人人人集（前部先生名義の句集）には「老妻に化粧をすすめ笑い合う」を筆太に揮毫阿々大笑、夜十一時再び先生の車で丁子屋旅館へ。愚妻に逢つて戴く。次の朝はよろつや旅館へ案内して戴き、お風呂へ入り大広間を見る。先生の体重十三貫五百匁。

八月二十七日



麻生路郎選
北川春巢選

扇風機公平無私な首を振り 兵庫縣 河原みのる
靴だけで足りず頭もとがらして

ミサイルを撃つミサイルを 宮城県

通勤はそのけそこ 特急が通る

ゴリラより一割安い人の値よ

てまえではよう食わぬから呉 鳥取縣 鈴木村飄子

団欒は青いスタレを透けて見せ

百姓の五時終い病気がと聞かれ

鶯の山門今し法話中

風が吹く入れ歯のあいを風が吹く

娘にやいやい云われ再婚す 石川県

誘惑をされた話をけなるがり

同 前田百万石 同村江坂改め

手ぶらでの見舞いへうれし涙が出

職場の花かしらんが仕事スロー モトモト

夫婦仲よすぎ女中がまたかわり

申し訳なく親の日へ土用の丑 京都府

八つ折りにする百円はあたためる

西陣の音 二句

光るので雷と知る機の音

機音が響く畳に兎の寐息

労働の貴賤を思う手垢取りながら 秋方市

待つ修行しに病院へ通うてます

功成つてまだガラクタを貯める癖

些細事を叱って係長孤独

太陽にさからう肌をもつ若さ 今治市

九住山へ登る 三句

乳しぼる音で高原朝が明け

頂上でカメラ嬉しい音を立て

頂上で半分すんだ夏期手当

退職金に住をまかして衣食足る 津市

モンペをずらし掃除婦風を入れ

同 大久保 和歌山府
同 宮川 珠笑
同 越智 一水
同 嶋野ひ呂し ひろし改め



川柳雑記三つ

石井かんな

先日ふと、一書店で「風流川柳写真集」なる本を手にとつて見ましたら、堂々と、今の時代に然も相当名ある人の編集とおほしき書物にびっくりいたしました。主に夫婦男女間を卑俗なものととして、川柳紹介をしていました。ごらんになられた方もあるとは存じますが川柳の歴史については何も研究不足の私ですけれど、現在の川柳家が、昔の或る時期に誤つた作句道の為にどれ程、苦しみ、これの良方向付けに腐心していることでしょうか。それなのに相当健全な方へと立ち向かっているか見える今の柳界に、又してもこういう書物は何としても残念に思います。勿論出版物の自由といえはそれままですも、その作者いわく、「川柳とはどんなものか知らない人が少しでも川柳について親しみどういふものか分るのに役立つために」と後記しているのですから一大抗議をおこしたい位です。でも一流の新聞雑誌は、断固として正しい川柳の道へときき進んでいる事は、何としても嬉しいことです。もう一つ川柳作家ならずとも、凡そ文芸家は、自分の名前の



老らくの頑固 同士の無言劇	同	親の目は怒っていないが子は見抜き	同
守衛室我が社を代表してゐる罷	同	豊年へ袴をはいた獅子が来る	玉島市 井上 旭峯
連休はゴミ箱に似た汽車の旅	松江市 内藤 喜夫	月見する芒も活けて老夫婦	同
個人的には同感とうまく逃げ	同	女房がおしゃれすずめる年になり	香吉市 奥谷 弘朗
子を信じ切つて小さな夢を持ち	同	代議員当選したら家をもめ	同
善意まだ実らず小さい自己嫌悪	同	クラス会カンニングした顔で飲み	石川縣 南 伝一
遠花火人を愛した日の記憶	西宮市 末沢 花美	選挙後の豪雨公約流れそう	同
八月五日戦災にて家屋焼失	同	父ちゃんの不在冷蔵庫はからっぽ	広島縣 山田スミ子
丸裸になつたその夜を云うて飲み	同	見えすいたお世辞聞いとく父不在	同
療友の死	同	定退の身に中学校頭です	兵庫県 常岡 孝風
悲しきは形見の品を恐わがられ	同	ビタミンをうつ麻雀のこと云えず	同
エレベーターに乗せられ	たほもとてまきき 大阪市 堀 風仙洞	忙しい人へ愚問のインタービュー	京都市 小黒 王石
伝言板ここはデートが目白押し	同	軽犯罪おかすに止まる観光バス	同
大胆か阿呆かショートパンツの十八九	同	無能無才にして恩給へただ一路	静岡市 多々良英舟
盲判押すのに印相気にかける	島根縣 景山 綾美	仏壇へやるぶどうまでつぶえらび	同
暑い暑いとは暇なデスク	同	甲斐性のないのが妻や子を叱り	兵庫県 遠山 可住
初盆に生きた亡者が寄つて飲み	同	再会の握手をすれば血が通い	同
そうめんの冷めたさで不意	香吉市 竹原市 大洲大八洲	幸福は親より高きねぎ坊主	玉野市 小谷 仙山
叱られている態度まで気に入らず	同	貝がらを拾つただけで海が好き	同

外に号を熟慮いたします。本当に本当に失礼ないい分お許し下さつて、私はこの号もできるだけ真面目な気持の出た号をと心掛けている者の一人ですが、御意見も他にあらうかと存じますが又おきかせ下さい。或いは私のこの考えは一人よがりかも知れません。依なようですが、明かるとして大衆に親しみのある言葉をと考えて今の私の号が成る程一番よいとも考えていませんが……。

川柳を本当に健全な真の純な芸術として発するには又号もそれに平行すべく良心的であつた方がいいのではないかと考えます。明かると強い笑いを要求される川柳ですから或る程度、微笑ましい号も一面必要かも知れません。大家に對して大変失礼ですが、三太郎、紋太余り大してふざけているともいえ、大衆に親しみのある名前として成功しているのかと思ひます。路郎先生の路郎本當に飾らず卒直で、愛され、健全な名ではな

車 福壽司

心斎橋筋大丸前
電話(271)三三四四番



台風の日旺大工間に合わず 兵庫縣 斎藤たけお

サラリーを夜の女にあわれまれ

同

網だなの土産車庫まで取りに行き

同

四十にしてまどわず未だ平社員 大阪府

西木 保夫

野球追い出せばバイクの練習来る 仙台市

平野 光道

社長談組合ストが未だ無し

同

出世した友は猛犬飼いならし

同

炎天を突く煙突の孤独なり 貝塚市

護川 梢月

年不感マラソンならば折り返し 青森縣

木村 涼人

この浮気許してくれると一人きめ

同

路郎先生をお迎えして

琴の音に雑念あるを見抜かれる 空岡市

出原 真奇

遠来の師を手古摺らす津軽弁

同

遅刻した机一日口重し

同

阿波踊待つ夕風の暑いこと 声屋市

里田一十

打水の庭も夕餉の味になり 大阪府

山田 蛙水

パチンコのない町盆の月かかり

同

自衛隊災害すんで忘れられ

同

クーラーをほめて勧誘員ねばり 大阪府

藤富 淀月

なんぼでも仕事さすのが妻のキズ 竹原市

杉原 愛鳩

雨もりを知らぬガードの下に住み

同

カメラ遂に買うてやれない夏相場

同

踊りの輪どれが妻やら娘やら 川崎市

赤池 五朗

冷房のパチンコホールへ夏期休暇 出雲市

中川 晃男

パパと呼びどうやら妻の座にも なれ

同

同情を女史の眼鏡がはね返し

同

年寄りの元気余白に申し添え 青森縣

岩淵 一星

女には弱く女に養われ 岡山縣

永宗 宗義

保険屋に押しありこちらに仮病 あり

同

養老院十人育てたのもまじり

同

どうしても帰るとバイク酔うて 高知県

山川 勝子

岳詰の労資もバツる盆手当 京都府

仲山三佐吉

冷房のみつ豆でよし女同士

同

アルバイト別途会計分とする 羽咋市

三宅 ろ亭

自墮落に暮らしてボロい夢を追 新潟県

小林 孝正

神聖と思えど仕事着鼻をつき 河内長野市

森本黒天子

いでしようか。といやて、ふざけた名前だから、のびるのびないのでも決してないでしょう。

平凡という雑誌が愛されているのは或いは、平凡という普遍的な大衆と共にある名前からではないでしょうか、早や明星という、何か私達から一歩離れた高貴なものとして映ってまいるようでございます。勿論、この言葉の感じでどうこう思うことは、或いは、一番つつしむべきで浅はかといわれるかとも存じ軽々しくいっている私が、批判の対象となるかも知れません。

次に川柳人口を増やすことについての当らない私感を申させていただきますと、人間は皆感情をもっています事として、生活の中に頭によくひらめく言葉を或いは川柳と名づけてよいか知れませんが、それだけに誰でも作れる強味が川柳にはあるといえます。でも本当に生命ある句を作るといふことになる、そう誰でも簡単にできるといふわけでなく、とてもとても至難なことといわなければならぬでしょう。そこに川柳が大衆の中に、素早くとびこんで行けるが力強い句となる名人芸になつてしまふのだと思います。ですから、安易な句は誰でも作れるが時代に残るような句は、数多く作れない所に川柳作家のなやみもあるように思います。今から新しい川柳をうちたてるべく、どれだけ大きな努力がいりますことか。大衆を安易さの作句から脱却させることは、又川柳と大衆とを疎遠



折伏に今日もお越しの顔なじみ <small>大阪市</small>	山田松太郎	病みぬいたおかげで古稀を若返り <small>愛媛県</small>	村上 石峰
居住権売値へ頑としてそむき <small>竹原市</small>	山内 静水	デパートの値札ばかりを見て歩き <small>宮崎県</small>	野口卯之助
アルバイト神輿かついで <small>大坂市</small>	山地 判志	子は大人親はだんだん子供じみ <small>大坂市</small>	宮尾あいき
老齡の嬰鑠皮肉他人が妬き <small>美木市</small>	高木繁太郎	人人に家へ帰ってホッとす <small>西宮市</small>	鶴飼 鮎子
そうするほか道がなかつた母と娘と <small>八尾市</small>	吉田 博一	病癒え恋の続きを追い始め <small>大坂市</small>	松川 美郎
施設にも基地にもならず村平和 <small>笠岡市</small>	谷本鈍愚坊	胸算用して交渉を引き受ける <small>大洲市</small>	中川 一生
出戻りの知恵もかりてる婚礼費 <small>羽曳野市</small>	福井与太郎	大ジョッキぐつと飲みほす <small>堺市</small>	神山 幸士
焦げた飯食べてもキャン不良 <small>羽曳野市</small>	古川 静波	いっぺんは逆らつてみる仲のよさ <small>玉島市</small>	水粉 千翁
よろめきのテレビで野球ふいになり <small>大坂市</small>	万代句念坊	パチンコに凝つて指先しびれてる <small>豊中市</small>	稻増 久雄
夏休みの成果色だけ黒くなり <small>見島市</small>	伊丹柳瓢子	知らぬまに女にこわいひとにされ <small>船橋市</small>	吉田 俊和
パチンコへ避暑のつもりと負 <small>新居浜市</small>	安藤 桂仙	安静の時間が苦になる不快指数 <small>羽曳野市</small>	岩井 紫貞
吸殻を踏み消すように阿波踊り <small>伊丹市</small>	小川静観堂	新任へ先輩らしゆう気を使い <small>愛媛県</small>	村上 竹生
大ジョッキ見事にあけた平社員 <small>七尾市</small>	松高 秀峰	にくらしい口もわが子の頼もしさ <small>松江市</small>	岡崎 祥月
西瓜畑うっかり行けぬ嫁の腹 <small>金沢市</small>	根山 杏花	金槌は泳がずボートばかり漕ぎ <small>笠岡市</small>	松本 忠三
テーブルヘゴジラのように孫が立ち <small>玉島市</small>	田辺 好女	ターザンの真似して子供降りら <small>大坂市</small>	増田 城東
口づけを素直に受ける天の川 <small>羽曳野市</small>	岡本紀太呂	洗いさらい一氣にいうて腹がへり <small>福島県</small>	住吉 貞坊
心配をさせて涼しい山にいる <small>羽曳野市</small>	石川 太柳	タイガース負 <small>大坂市</small>	古谷まさる
世渡りを太う短こう二号の気 <small>姫路市</small>	隠岐 不酔	落ちぶれて従兄でさえも近づかず <small>奈良県</small>	木村よしを

味の七-コ

モダン 川柳

心 齊橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい

にしてしまうことにもなるかとも存じます。それで応募句の中からもできるだけ新人を見つけ発表してのばすことは選句者としていつも心掛けてはいると存じます。けれどもいい句はいい句として健全な川柳の紹介のために、どしどし掲載することも、大切な使命のような気もします。いい句はどうしても、常連によって占められることになり易い、右のような次第で、新人の入る余地は大変、難しいことのように思います。真の川柳がどういうものかどんな題材で表現し、風刺したらよいかということは大衆が、優秀句を見て学び、徐ながら川柳台頭の基盤を作っていくことと思います。いささかも努力をゆるめることなく川柳家が一致結束して、好ましい川柳の方向づけに力を致そうではありませぬか。

志明星生
梅曉白清
藤沢根川
後米山早
市部府
大阪府
大東大



評句

リレ

降りしきる雨に場末を感じたり 鶴汀

梅志二鶴汀さんはこの頃すこしスランプ気味ではないか。場末の句というものは、たとえば丸く大きい月がぬっと出たとか、湯気を立てたまんじゅうがうまそうに積んであったとかいうなら川柳になるが「降りしきる雨」だけでは川柳にはならない。もう一ついいのは「感じたり」で、そうですかという外はない。

曉明二場末に降りしきる雨は場末ならぬ所の雨とは違う。相対的に小さい、貧弱な、時には粗末なであろう場末の建物、場末の人々それらをくるんだ場末の雰囲気感降りしきる雨に一そうその情緒（否哀れさ、いたましさ、淋しさ）が感じられて、此の場合「感じたり」は私は首肯出来ると思う。余韻もあり発表紙で読んだ時から佳句と思っていた。

白星二謙虚に作者の位置に佇って、感じめぐらしてみたが、曉明氏の言われる、場末の雰囲気感の感じも、多少出ていないことはないが、作者のひとりよがり。矢張りある程度の観賞眼のある人々をレベルに置いて、感覚の上で、普遍妥当性がない。作者のオナニズムに終っている。路郎師が「川柳職業人」を宣言された当時の師の悲

愴な、生命を培った情熱をもう一度回想してみよう。近著「旅人」にはなかったが、師の初期の作品

くろくろと道頓堀の水流る等の（小生依住いで当時の雑誌が手元がないのが残念、記憶に残っているもの）一連の作品の勢いと対照して見よ。

テスト・アンド・エラー、試行錯誤で、彷徨し、苦悶し、思索し壁を打ち破り、乗り越えて、川柳一途に押し通してこられた師の一連の初期の作品と。

清生二川柳はもともと市井に生まれたため場末の生活はあらゆる角度から描写されてきました。従って場末を概括的に把握した句を作るにはとりわけ新しい着眼点が必要で、これは素材が身近な割にたいへんむづかしいことなのです。この句一読して清新な感覚に打たれたのですが、再読して何か物足りないので、それは結局この句には作者の眼は示されているが、心が現わされていない点にあるのだと思います。作者の心を曉明さんはいろいろ説明されましたが、それを作者から聞かしてほしいのです。作者がどう感じたか、どんな発見をしたかが知りたいのです。感じはわかりますが、言い足りないことと余韻のあることとは違い

ます。ちょっと惜しいと思いましたが。

梅志二私は作者の鶴汀さんをよく識っているので近い感じからああいうことを言ったのですが、本當の気持は清生さんが良く代弁されています。選者というものは労りの心をもって句を見てゆくから、作者の気持が手にとるように分かるのです。恐らくこれは鶴汀さんの実感でしょう、私にもそれは分かる。しかし評者の言は選者の見るところとは別なものがあられる厳しさがあります。どうか心機一転して句境をもう一つ緻密にして下さい。

曉明二敢えて弁護する積りは毛頭ないが、私の主観からだろうけれど、今度の組上りのった句の中では私の好きな句である。他の批評者の一字一句しみじみと勉強させていただき、共鳴もしたあとで……更に「よさ」があるように思われてならない。

白星二ボクは作者の鶴汀さんに一面識もないので、句の上から毒舌を吐いて仕舞ったが、全面的に清生氏の適切な御批評に大賛成です。梅志さんの仰言る選者と評者の違いも全く同感です。因に二十一年に互る、路郎師の不肖の弟子として、師の選の無言の労りと愛の鞭を、身を以って体験しています

選者はその作家を、伸ばさせるべく、その個性を育成すべく、愛の眼で選をされているのです。そのことを充分承知の上で、評者の立場からは、前にも申し述べたように、この句はそれ程のものとは思われない。

清生二軽妙さと川柳には少い把握のしかたはまことに結構だと思います。理屈を言わずに素直に鑑賞すべき句かも知れません。しかし私には「降りしきる雨」に限らず、しぐれであつても、また夕暮であつても、場末には場末の独特の感じがあると思えるのです。また屋敷町にも「降りしきる雨」の感じはあるのです。ありふれた風景の中に詩を感得された眼の非凡さはさすがだと思いますが、素材そのままで句になりません。作者の思いがこもり、観点が示されねば共感は得られません。句として完成するには、作者が感じたものを完全に再現する情景と描写が与えられなければならないのです。

雪しんしん保険屋へ降参し

可住

梅志二しんしんと雪の降る屋外の景色と、その道をはるる来てくれた保険の外交員、それは男か女か、遂に降参して要求通り契約をしたという、田舎にはありそう

な情景だが、とってつけたような句で、生活の一コマにしても余りピンと来ない句のように思うが如何でしょう。

「晓明」人情の機微をついたという句としていかす句の如きに見えるが、梅志さんの言われる如く、成功していない句のように思える同じ事だが、下五を「ことわれず」とでもする方がよいのではないか。

白星「この句も、両先輩の温厚な批評に賛。

清生「川柳家には人情ぶかい人が多いので外交さんを扱っても天候を通してその苦勞ぶりに同情するといった作品をよく見受けまますどなたのお句でしたか

濡れてきたことを外交員言わず

婦人外交員木枯へ去る顔と

なり

といった調子です。類想の多い素材で作句するときはよほど新しい発見があるか、卓越した表現がなければ駄目だと思います。厳密に言えば典型となるか没になるかです。しかしこの作者が平素から五

七五の定型を意識しつつも音数に拘束されず適切な言葉を探し出し多くの破調の立派な句を残しているのは作者の信念を示したものです。

梅志「何か先輩諸氏にご意見があるかと思つたが、矢張りとり立てた解釈はなかつたようで、可任氏としては不十分な作品らしい。

清生氏が示された二句は、どちらもよろしい。こんな句なら文句はないのですがね。いつごろの作品でしょう。

晓明「安易に取組んだという感じ。これでは大関でも危い危い。

白星「先ず「降参し」のボキヤブラリーがいけない。清生氏の仰る、定型でいい句と、破調にかえて生きている句がある。

いっそちぎろうか、シャツのぶらぶら釦（失名失礼）

これを定型にすれば、句が死んで仕舞う。破調にして、生きた好例であるが、この句は成功していない。

清生「私が先に挙げた類句はいずれも数年前のものだから、それからこのような句はたくさん作られていて思ふのです。日常の些事に詩を見つかることも大切ですが、ありふれた事柄を平易にまとめたような作品がいつもたくさん発表されているのは残念です。

短詩型の世界で芸の意識が欠如していると言われて久しいのですがこの句などもっと構成に苦勞されるも、もともといひ感覚をもった作者だけに、さらに個性的な格

調の高い作品ができたと思うのです。

ドラマだから姉に恋をばゆずりもし 東天紅

梅志「こんな句を見ると悪口が言いたくなる。この中には真実が一つもない。ドラマでは姉に恋を譲りもしようが、実際はそうはいかない。恋のためには姉も妹もない。なるほどそうかもしれないがドラマであればなほと思わせる脚色をするそこに情理も立ちドラマとしての価値が生れる。姉妹とか兄弟とかいうものはたとえ醜い争いをするがあつても一つ腹から生れたという情愛は固いものだ。この句は何を強調しているのか、恋というものをより美しく感じているのか、その辺が不明と言う外はない。

晓明「虚構という語がある。ありそうもない真実か、ありそうもない良いお父さんであるものだろうか」などよく聞く所だ。生かすも殺すも、逢わすも逢わさぬも小説家、ドラマ作家の筆先一つで自由だ。原因結果、筋書きが詳細に解らねばゆずるのがよいやら悪いやら……。ゆずれるやらゆずれないやら……だ。それは何れとして、前に触れたように「ドラマ」だからゆずれるんだ（筆先一つ）しかし

その裏も考えられて、軽妙な面白さを私はいたたく。

白星「梅志さんの「真実が一つもない」句だから、嫌いと言う批評は、ボクは全然反対。ボクの川柳観は、いつの日か雑誌に書いてみたいと思うのだが、「可能性の文学」があるなら「可能性の川柳」もあつていい。梅志先輩は、私小説、否、私川柳作家か。川柳のカテゴリーを、そんなに狭く考へなくともいい。虚構、結構。自由奔放でいい。これも路郎著「旅人」にはなかつたが

俺の子を俺が折檻する大工これが元々川柳。而も、トレードマークの付いた……。こんな句想が今浮んだとしても、もう駄目。手遅れ、しまった。無念残念と、地団駄を踏んで、我々川柳家を、せきたて、焦慮させ、歯がみさせる句を渴望する。この句は勿論川柳にはなつていないが、ああそうと、平気で読み過ごせる程度。

「みのむしのなんぼ通うても壁だった」豆秋さん。畜生、嗚呼いい作家を失つたものだ。

一瓢氏から今回は特に、マンネリズムを打ち破る批評を、との要望があつたので、批評ならぬ斯る悪口雑言とはなつた。それでは、

白星、貴様は、どうだ、と言われれば、かえりみて、忸怩たらざる

を得ないのではあるが。妄言多謝

清生「人間の心理は一つの事柄に対して必ず一つの答えしかないと言つたものではなく、この場合の現実では姉であつても恋は譲れないのだというのも一つの見方であつて、作者の考え方を示しています。もっともシナリオライターなんて世の中をよく知つていそう

で案外ものを知らない面があり、テレビでも大みそかのドラマはご時世でも必ず借金取が良民を追いかけると、劇に出てくる犯人は実に巧みに逃げても必ずつかまると、とりわけ法的なあるいは学

を

を

を

を

を

を

スマートで 着心地良い

GOLDEN O.S.K.の 紳士服

各地特約店に有り

術的なことには現実には即さない描写が実に多いものです。この句も作者の意図とは少し違うかも知れませんが、そういったライターの軽薄な処し方や、それが通用するマスコミのあり方が伺い知られて結構いただけるのではないですか

梅志「どうも合い棒の諸君は『真実』と『事実』とを混同されていようだ。虚構結構。しかし虚構の中にも真実はある。真実とは、人が自ずからそこに引き付けられてゆく一つの境地であって、ヤクザもその時は真人間にかえる。作家はつねにそれを求めているのではなかったか。戯曲であろうが小説であろうがみな真実を探し求めているもので、あな勝ち作り事ばかりとはいえない民衆がそこに、戯曲や小説に引き付けられるのは、そこに真実があるからだ。どう私は観じている。私は今回の句評では総てに巨りだいが酷評を下してきたが、私は作品の出来、不出来を言っているのではなく、そこに真実があるか無いかに直感を働かせて来たつもりだ。

東天紅さんは仲々しっかりした作家だから、私は敢て苦言を呈したつもりだが、酷評の点は重々お詫びする。この句は「ドラマだから……」のだからがハタタリになっている。ドラマならともすれば

無難だったろうが、それでは句が死ぬ。まあこんな句は作らない方がいいと思う。

晓明「命がけの恋ならゆずれる筈がありません。しかし、そこにドラマライターの自由自在の人間が浮んで来そうだ。

白星「いいえ違います。肉親の姉なるが故に、恋を譲った実例を身近に沢山知っています。梅志説の「ドラマだから」が、いけない。落書きの通りに二人添い遂げる

落書のように二人添えずいる

酒



清

灘・魚崎

大塚合名会社醸

どちらも一応川柳にはなっている。そして、どちらも実際にある。梅志さんとは「真実の探究」などと難しい文学論にまで発展して仕舞ったが、それには異論はない。只川柳に、松本清張、水上勉、寺内

大吉ばりの作品があってもいい。保護願いな家に帰れば売られ

ます (失名失礼)

結納の晩から居らぬ小間使 (失名失礼)

い 等の梅志先輩に叱られそうなの

契機となった事実があります。清生「句評は決して句の価値を定めるのではなく、共通の句を採り上げることによって各人の川柳に対する立場や見解を明らかにするものだと思っています。従って句評は句作に関する参考意見であって、言うまでもなく規範ではないわけです。当然のことながらアンカーとして念のため。

とここでこの句「だから」にいろいろご意見が寄せられましたがこの句の構成上の主体は「ドラマ」であって、ドラマで妹が姉に恋をゆずったが、実際には(あるいは私なら)そうはしないだろうという心情(あるいははしなかった事象)を述べたもので、句の良い悪いとは別に「だから」はこの句の大切なポイントなのです。恋をゆずることの可否やその虚実はこの場合直接には問題でないと思う

です。(担当・真鍋一瓢)



山本葉光

追悼の夕べ

川柳雜誌社
阿倍野支部
八月句会

八月二十日、葉光さんをしのぶ柳友が二十数名大万階上広間へ参集した。

正面に故葉光さんの写真がかざられてあってみな黙礼して座にいた。梅里、白柳両氏からも葉光氏ありし日の遺芳など語られ、故人の思い出はつきるところなかった。

各人おもしろい追悼句をささげて葉光さんを新たにまたしのびあったのである。葉光さんの目はいつも涼しく美しかった。

思いのこすこともなからん 亡母のもと 路郎

先生の追悼句のように、葉光氏は思いのこすことなく母上の膝下へ行かれたのである。(F)

釈法珠七月の陽も暑からず 水客
職人の話も出来ぬとこへ逝き 白柳
雨の日は天下茶屋にて「こんばんわ」 玲人

神通力死生へ無碍の境を越え 生薑
はっきりと蓮咲く国へ独り旅 正一

これからは蓮の葉光る句座にあり 柳安子
ひたすらに冥土で句作ねり 給え あいき

極楽へ道ぶしんをば頼んます 専翁
亡母さんに自慢の川柳見せに行き 静馬

惜しまれて散る葉桜に露光る 梅里
川柳に生きて葉光今はなし 双葉

もう死期を悟れど川柳捨てられず 圭水
柳人を尋ねて極楽駆けめぐり 和郎

十字架を降ろし静かな旅であれ 圭井堂
めぐまれぬ身体を趣味に生きた人 清人

天二つとってとうとう寝てしまいい 八郎
豆秋さん迎えに来てはる王子町 一三夫

ひっそりと生きてぼつんと死んでいき 晃
背負われもせず天国へひとり行き 文秋

何もかも伴せにして釈法珠 博也

のびた平均寿命

—男子は六十五才

—女子は七十才

中島生々庵

最近の厚生省発表によりますと日本人の平均寿命が、男子は65才女子は70才を超えて居ります。これは先生のお生れになった明治二十一年頃に比べて見ると、男子も

な

歩、環境衛生の向上、食生活の改善等に多くの要素があるのでありまして、デンマークや、スエーデン等のように完備した社会保障が得られると日本でも男子が七十才を超すのも困難なことでないそうで現在の私達にとりましては、まことに心丈夫に感じられる次第であります。

女子もなんと二三十年も寿命が伸びて居ります。これに就いての原因と致しましては、勿論医学の進



ところが白洲正子氏が週刊文春誌上に、「パリの老人」と題して書いて居る記事を読んで見ますと「セーヌの河岸に、老人達がぼんやりベンチに坐って一日動かないでいる。しかもその老人達はベンチでなく、身なりもきちんとして小金もたんまり溜っている老人だという。社会保障が完全となり個人主義が発達しすぎた国の文明が生んだ亡霊たち——花の都パリにおいて、私がつともひかれ

たのは、その空漠たる表情であつた」とあります。

して見ると医学が進歩したり、社会保障が完備したために、老人を長命させるだけでよいものだろうか。この問題で東邦大学の阿部教授は「社会保障とか、老人の日の行事ぐらゐでは解決は出来ない。結局死ぬまで何らかの仕事についてなくてはダメである。停年制で職を追われた老人達が、ただなんとなく十年、二十年も長命させられたのではやりきれないだろう。老化を防いでやるのが老人医学の真の目的であつて、そうでなくては却つて罪つくりかも知れない」と云つて居ります。

例を挙げるといくらでもありましようが、六十八才で土俵を去つた小鉄は本人の願ひもあり、ファンの人達の熱望もあつて、形は客員の態ではあるが、再びあの美声を私達に聞かせてくれます。元氣であるし、先年亡くなった中村吉右衛門は、聞くところによると晩年七十才を越した頃、健康を案じ過ぎた周囲の人達が、無理に舞台を休ましたところが、そのことが却つてあだとなつて、目に見えて元氣を失ひ、老衰して行きそ

再び戻した。するとすぐにまた情熱を取り戻して、毎日楽しく業屋入りをつづけたと伝えられて居ります。

又一方では米のめしばかり食べて居ると脚氣になるぞ、塩辛いものは胃腸になるぞ、脂肪食は動脈硬化になるぞ、酒は脳溢血、煙草は肺腫等々とうっかりして居れぬわけで、長生きしたいためには、酒や煙草は勿論、米も美食も遠ざけて、仙人なみの生活をしなければなりません。

然しこのように仮りに十年か二十年か長生きをして、愈々最後の死ぬ時に考えると何ががあるかその十年か二十年かの間に得た経験だけであつて、苦しかった、楽しかった、悲しかった、腹が立った等の連続した経験だけであります。そういう風に考えて見ると長生きすることばかりにあくせくと専念するよりも、現在の今日、いろいろ深く広く経験に向つて突進することも一種の長生きであるかも知れません。

さあ、こういう色々な人の説を聞き乍ら我が路郎先生の現在の御生活を思うとき、如何でしょう。御齡は日本人男子平均寿命を十年も超過していますし、山積する要件雑件を快刀乱麻の如く処理し、益益御健康に、そして愛煙をくゆら

し乍ら一本の晩酌に洵然たりというお姿は、何がそうさせたか。浅薄な医学智識では到底理解出来ない何ものが存在するのは明かあります。

●疲勞 ●食欲不振 ●神経痛 ●肩こり ●便秘 ●つかれ目

タケダ薬品

アリナミン

無臭性

七月分の誌上に路郎先生は次のように書いて居られます。「あいまかわらず短詩川柳に情熱を燃やし続けている。老人の熱はそれおそろしいと、そしらはそれである。短詩界に骨を埋めることこそ私の終点だと思つて居る。曾て私には多くの夢があつた。これからの私にも次ぎ次ぎと夢があるだろう。私の夢には私欲はない」と。生活の基調に自分の職域をつぎ込んで行くのが先生の健康法であり長寿法であります。



和漢の賢女

富士野鞍馬

桑の葉と紅葉和漢の賢女也

(タル一〇一)

と詠まれてゐる「桑の葉」は、古代中国魯の秋胡の妻であり、「紅葉」は、吉原三浦屋の二代目高尾大夫をいったものである。

「秋胡の妻」

昔の中国、魯の国に秋胡という男が居た。妻を娶って五日目に就職して、母と新妻を家に残して、单身陳へ赴任した。そこで五年間無事に勤めて、相当金を貯めて家へ帰ることになった。自分の家に大ぶん近づいたところの路傍の桑畑で、桑の葉を摘んで居た美女を見て、ふっと野心が起り、持金を与えるといつて、戯れかかった。ところがその美女は、

「田蚕紡織して父姑に奉事

す。なんぞ他人の金を待たんや」

と、いい放つて見向きもせずいつてしまった。

桑をとる女にはれてひよんな事 (タル三五)

ひどい見忘れ桑つみをくどいて (〃三九)

やがて秋胡は家に着き、母が自分の妻を呼ぶのを見

ると、それは先刻桑の葉を摘んでいた美女であったのには驚

いた。妻も先刻の男が夫であることを知ったが、その浮気

な心を恨んで、河に身を投げて死んでしまった。

この話は、わが国にも伝わ

り、「桑の貞女」といわれ

て、川柳にも詠まれている。桑をつむ女房にはれるばかな事 (タル二二)

両方でハテナハテナと桑畑 (〃一三八)

桑の木の下で女房をめつつけ出し (〃三〇)
女房にとんだ無心は桑畑 (〃一〇六)
桑畑しらぬが仏おがんでる (〃二一〇)

この中国の貞女を、わが国の、高尾大夫と並べて、唐で桑和では紅葉が賢女なり (タル八八)

桑紅葉漢の貞女に和の意気地 (〃一四六)

と讃詠している。「紅葉」で高尾を表してある。

「高尾大夫」

仙台侯伊達綱宗をふり通して切られたいう高尾大夫は吉原三浦屋の抱えであった。万治三年(一六六〇)に綱宗が

通いつめたという事になつていて、「万治高尾」といわれている。

大名がこはいものかと高尾いひ (傍初)

高尾ます近うまいれが氣に食はず (タル九七)

金箔の付いた浅黄を高尾ふり (〃五〇)

大鳥毛高尾りっぱにふり通し (〃二一)

高尾が失礼三浦屋は度々詫る (〃一八)

十九文はどももてない伽羅の下駄 (〃一五)

綱宗は伽羅の下駄をはいて通つたといわれている。それでも「十九文下駄」ほどでもせず、ふられ通した。高尾には、島田重三郎という情人があつた。

また例の下駄の客かと島田言ひ (タル一四三)

と詠まれている。どうしても高尾はなびかないので、綱宗は高尾の体重と同じ重さの黄金で身請けしたのである。

むごい事高尾つぶしに売てやり (タル二二)

なんの因果に大名に請出され (〃二四)

すきんせん事とちきりにぶら下り (〃四)

はかりにかけても高尾はびんとする (〃一七)

ふところへはじめて高尾五百入れ (拾七)

その時の目方は二十貫もあつたというから、恐らく両袖に鉄でも入れていたのであろう。二十貫というと、小判で四千二百五十五両という計算になる。

身請された高尾は、船に乗せられて、芝の伊達下屋敷へ向つた。

船に乗る時分正味の高尾なり (タル二四・五四)

船の中で綱宗は、なお諄々と口説いたが、どうしても高尾は承知しなかつた。

傾城のあいそづかしを船でいひ (タル二四)

いよいよ怒つた綱宗は、三ッ又の辺で、高尾を吊し切りにして、川へ放り込んだとい

われているので川柳もそれを詠んでいる。

あいやでありんすを聞き抜き放し (タル一四)

よくふりをったなと舟でむごい事 (万天元)

三またで玉のこしからころげ落ち (タル二三)

床花にならぬ紅葉を切つて捨て (〃二二)

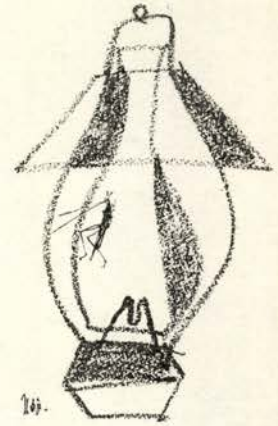
切捨にするには高い女郎なり (コリ三)

この話は虚構であるが、高尾は万治二年(一六五九)十二月五日に病死したのが事実のようである。従つて、万治三年に綱宗が高尾に通つたといふこともおかしくなつてくる。

寒風にもろくもくつる紅葉哉が高尾の辞世だといわれ、橋と紅葉操の海と川 (タル二五)

と、弟橘姫とも並べて詠まれている。

秋のこと



客水本正

京都の西大谷に先祖からのお墓がある。市電の五条坂から、ゆるい石畳の坂道を上りつめると清水寺の境内へ出る。そこから名産の清水焼を売る店を両側に見て、ダラダラと下りてゆくと、昔からある七味唐がらしの店へ出る。その前から右へ折れる急坂は三年坂といつて、ここで転ぶと三年のうちに命をうしなうと言ひ伝えられている。静かなこの道を突き当たると円山公園へのなか頃辺りに小高い高台がある。ここに高台寺があった。広い境内いちめん萩が植えられていて、この花が一ばん好きだった母と、秋には葉脂りを兼ねて必ず此処をおとすれて、ひとときを萩のなかに過ごしたものだ。

高台寺 萩なつかしむ人と
併つ
今では、後ろの丘も切りひらいて、大きなコンクリートの仏様が据えられている。その母も今はもういない。

二、三年前に信州の小谷温泉の紅葉のことを書いたことがあった。北アルプスの支那栗松本から大糸線で糸魚川への少し手前、中士から十キロ余り、中谷川に沿った山の中の温泉である。小谷と書いてオタリと読む。

ひなびた湯槽からみる窓は遙かに高く、湯煙りが月光のなかへ流れてゆくのが美しかった。翌日は妙高の笹ヶ峰牧場へ山越して、昏過ぎには軽く着く予定で弁当も持たずに宿を出た。道は細いのはつきりしている。文字通り眼のと

どく限り、前も後も右も左もそして下も紅葉の赤である。いつからかシトシトと小雨がおちてきて、そよとの音もしない。全く音のない赤ひと色の世界である。道は行けども行けども峠には出ず、山の腹を巻いてゆくようである。日も暮れてくるので、人里へ出ると思われる谷の方へ思いきって降りてみることにした。悪戦苦斗のすえ昨日通った見覚えのある道へたどりついた頃は、足許も見えないほど暗らかった。九時過ぎ、疲れきって、中士駅前に一軒ある宿にたどり着いた。十二時間、飲まず食わずの歩きずめ、こんなに腹のへったことはなかった。鳥をつぶしてくれなすき焼のうまかったことこんなに食べたこともなかった。食べ終って同行のY君とホツと顔を見合わせて小一時間、壁にもたれたまま無言だった。物を言ったり、動いたりすると、喉からすき焼があふれてきそうだからである。食欲の秋がくると、生れて一番腹がへって、そして一番腹のふくれたこの日のことを思い出す。

その頃は、避暑地として余りにも有名な軽井沢を敬遠するかのようになり、低い山裾をぬって軽便鉄道が、氣息えんえんと草津温泉まで続いていた。草津高原を徒歩で半日、白根火山のふもとに万座温泉がある。夜には電灯がなく、部屋が部屋へランプを配ってきた。夕食の膳に出た山の茸がとても美味しかったので、これ何ていう名前とたずねると、十六七のクリクリしたモンペの女中さんが真面目な顔をして答えた「それ、きのこです」

今はおもちゃのような軽便もバスに変わっているだろうし、温泉にも勿論電気が点いていることだろう。

ちよん切られたトカゲのしっぽや、取れたカニの足はまた生えかわってくることは知っているが、ウズムシの面白い話を京大の宮地教授が書いていられる。川底の石や木の葉の下などに住んでいる淡水虫で、これは雌雄同体である。

夏の間は体の中央に穴ができて、そこから二つに切れて無性生殖をするが、秋が過ぎると先ず精巣が熟してき、交尾して精子を交換する。そのあとで卵巣が熟し、受精が体内で行なわれて産卵するといふ便利さである。その上なお面白いことは、この虫は頭を切れば頭を、尾を切れば尾が生えてくる。頭も尾も切りとると胴体から頭とシッポが生えてくる。つまり一匹を十に切り離すと二週間ぐらいで十匹になるといふ、まことに便利至極な再生をやっている訳である。

気遣い沙汰のような夏山の騒ぎがおさまると、高原地帯は自然を取り戻して秋の気配になる。ところが、みどりの葉に真白い幹が陽の光りに映えて美しかった白樺の林は、手のとどく限り白い皮をはがれて、ヒビわれたはだをさらしている。シラカバの白い皮は、もう再生することはないのである。私は何となく、ウズムシのことを思い出して苦笑していた。信濃の秋は早い。

「お買物」
は近鉄で!

上六
近鉄
アベノ77-8331
アベノ77-8331
上六77-3331



「ハコ」愚談

戸田古方

みのむしのなんぼはつても
壁だった

又、豆秋さんの句が出てしまいました。

西遊記に、孫悟空が思いきり、走りまわって、あばれまわって、さて気がついてみますとおジャカさまの掌の上だったという話があります。

人類は地上に住み、その地上が地球上だということを知り、さらに百年位前からは自らの知慧で空にまい上ることを覚え、最近では地球をとりかこむ空気の層をつき破って飛び出しはじめました。

しかし、しかしです。考えてみれば、これもおジャカさまの掌の上なのかもしれません。
人生を考えてみると、何かこう一生閉いの中ですごしているように思われるのです。しかもその閉いは型にあらわれたものもあるし型にあらわれない眼に見えない閉いもありそうで、そういったいろ

いろの閉いととりまかれていての
ではないでしょうか。

閉いといって歯切れがわるければハコとしてもよろしい。しかしハコは必ずしもさいころのような正六面体や、その他の六面体であるとはかぎりません。

第一、地球は球なんですから、その地上は水平面でなく、球面でなければならぬし、その上をおおう天空は又、プラネタリウムの天井のように球面なのです。
人間はハコから出てハコに入ります。始めのハコは母の胎内の子袋、すなわち子宮です。何も人間に限らず卵生のものでその卵もそうならば、植物の種子だって同じ性質のものでしょう。そして最後は棺の中へ入るのです。火葬にすれば骨箱です。
ハコを六面体と限ってはこの話は進められません。
われわれの一番身近なからでもハコの組合せです。

人間を描くとき、胸も頭も丸か楕円形で始めます。胴には胸とい

うハコと脳というハコがあって、そのはつきりくびれたところがウエスト。腹の下の方が尻でそこが

ヒップ、胸の一番大きな閉りをもつところがバストというわけですが頭は勿論楕円又は球型で、入れこ細工の様にいくつかのハコから出ています。脳を入れるハコ、鼻の中には鼻腔というハコ、耳の中にもハコがあり、口の中は口腔とい

うハコで、このハコの中で舌が自由にごいってものをいっているのです。見方によっては気管や食道のようなくだもハコの変型とも考えられます。肺も心臓も肝臓も胃もそして腸もハコです。
一生の住居である家は勿論、典型的なハコです。古代人の住んでいたという洞窟から近代建築の粋を集めたモダン建築までみなハコ集団住居のアパートもビルディングも勿論ハコです。

キモノはハコでしようか、一寸おかしい気もしますがハコでしようね。カバーという方がよいのかもしれません。

食べものはどうもハコとはいいいにくいのですが、食べものを入れる器の方はまぎれもなくハコです入れものなしの食べものは余程特別の場合になりますから、食べものもハコに無関係ではなさそうです。古代人が土器をこしらえた動機などもどうやらその必要にせまられたからでしょう。

その外、生活の道具、わたしたちのまわりのものはみなハコの類で、そういうハコの御世話になつて生きて来ているのです。

しかも眼にみえるハコの外に、眼に見えないハコにどのくらい厄介になつてゐるか。

人間は集団生活をする動物です家族のハコ、グループのハコ、職場のハコ、地域社会のハコ、国家のハコ、その上人類のハコ、みんなハコばかりです。

夫婦のハコ、親子のハコ、師弟のハコ、あるときは道徳となり、またある時は規則、法則、法律ともなっています。一寸ゲームをするにしてもルールというハコからはみ出すわけにはまいりません。だからとていくらかいてもきりがありませぬし、こんなことは書

かなくつたつてわかり切つたことかもしれません。いわずもがなだとも思いますが、こんなものの方をする事で人生に何か新しい折目のようなものをみつけ出してみたらと思つてゐるのです。

自然科学の世界に自然法則があるように、人間、生きるためのルールがみつかつたらしめたものだと思つたのです。

歴史法則ということばが昔からありますが、人間社会の出来事は「会議は踊る」の歌ではありませんが唯一度きり同じものは決して二度はないといいますが、この見方からすれば人生の法則発見なんかは極めて大それたことです。少し妥協すれば似たりよつたりの事柄とは随分多いものです。「楽は苦のたね、苦は楽のたね」などいう諺もこうした長い経験の結果みちびき出されたものなのでしよう。

だから、必要の程度で利用するとなれば、歴史は沢山の法則の種類になるようなことを提供してくれているといえます。

そこでハコの法則とはどういうことでしょうか。さきにも申しましたように六面体だけがハコではなく、しかも蓋のあるもの、又、蓋も側面すら時にはないものも考への中へ入れて行きましよう。
第一、地球は球面だから、球面

の上では厳密にいつて直線が考えられないといひます。ユークリッドの幾何では二点間の距離はその二点を結ぶ直線で只一本よりないといひますが、高等数学といひか高等物理学といひますかアインシュタイン博士の相対性原理とかでは二点間を結ぶ線は無数にあるといひます。地球は球で、球面は曲線だからどんなに短いものでも曲線は曲線直線は直線、だともういひたいので。そんなことを一寸と、わかりもしないくせに考えの中へ取入れますという自然の六面体などという考えは消し飛んでしまふわけでは。

まあいいでしょう。ハコの中や、ハコにとりまかれてゐるのが人生だとしますと、この人生をうまくやってゆくためには、ハコとはどんなものかということを知ることははじめねばなりません。

今の相対性原理の話もその一つですが、われわれとしてはそんな理屈より、ハコのエチケットというふうなものの方が身近かです。丁度我々川柳を作るときにあたえられる課題ですね。初心の日から数十、あるいは数百と課題にぶつかって来ましたが、課題をみた瞬間、しばらくは、純真無垢に課題を考えます。真面目に誠実に、奥さんと夫人とのちがひ、どひんと茶びんのちがひ、日頃はとんと気にもしないで使っていたような語句が生命にもかかわる重大事

件のように顔面のおやじが眼を白黒させて考えはじめます。側から見ていたら少々おかしく見える程の誠実さです。しかし、しばらくのうちにどうにか片がつくわけですが。川柳人はそうした吟味といひか、調査といひか、研究といひかそんなことに他の方々より慣されていられます。おそらく、私がここに愚にもつかぬハコの話をもち出して、それを読んで下さっているうちに、そういう心の動き方はして下さっていると思ひ、安心します。

ハコの性質も銘々である程度のがつた結論が見つかるでしょうが、それが見つかったところで先ず、そんなものかなと思ひて下さるでしょう。そこまでついて来て下さればもうしめたもので、ご自身のハコが見えてくると思ひます。もし、肉体的にでも、精神的にでも、あなたをとりまくハコのどれかに抵抗のようなものを感じていられるとすると、あるいは見えて来たためによけいにはつきりとそのひっかかりがなるかもしれませんが、その次には、ああこんなことだったのかと、解決の工夫を自身で見つけていただけるのではないのでしょうか。あまり簡単に見つからず、簡単に思ひかえしてさらうより、抵抗の角度がかわつてさらに抵抗を深め、それからだんだんと抵抗が自然ゆるぐ方がよいのではないのでしょうか。とにかく、今までハコの中にい

るなんて考えてもみななかったところへ、突然ハコの話が出て、ハコを意識してもらつただけでも大したもの、結局、距離をおいて自分を客観化するということになるのではないのでしょうか。川柳を作る方々はそういう客観化にはよく慣れていられるはずですよ。まあこのあたりで話題をかえましょう。

いろいろのハコ、大きいハコに小さいハコ、大きいハコはその中でうごきまわるだけでも大へんで。いろいろな乗りものを使うことも必要になってまいります。この乗物ですが、一時的の家ともいえるこの乗物がみな文字通りのハコです。自動車、バス、列車、電車、飛行機。みなうごくハコです。

戦争のすんだあと偶然豊橋の町でのがた電車、ガタガタで動くたびにギシギシときしむのです。今にも分解しやせぬかとビクビクものでした。こんなひどいのは珍しいですが、一般に乗りものハコはがっちり出来て、ゆれうごくことを立前として作られています。地震や台風におびえる度びに、電車みたいな家に住めたらなあと思ひました。浜寺の海岸に住んでいました頃、船の船室を海から運んで来て、下をコンクリートでかためて波打際につき出した家を建てた人がありました。どんな嵐にあつてもビクともしません。真鍮の円い金具にはめこまれたガラス一つにしても嵐にたえ

るようにはじめから作られているのです。

まあそのかわり、船や車を作るのには同じ大きさの普通の建物の何倍かの金をかけて作られたのでしよう。

そんな金もかけないで、出来るだけ安上りで家を建てておきながら、そら風だ、そら地震だと心配する方がどだい無理なのかもしれませぬ。

仏教で大乗、小乗といふことがあり、仲よくキリスト教にノアの箱船の話があります。大乗、小乗といひのを具体的にあらわした船や乗物の話はききませんがノアの箱船の方は旧教に出てくる天地の大掃除の嵐に立派に耐えぬいたわけです。

大乗、小乗といひのは大きい乗りもの、小さいのりものというわけで、自分だけが悟り得るのが小乗、いわば一人乗りの乗り物、スポーツカーか単座の飛行機か、あるいはオートバイみたいなもの、大乗といひのはみんないっしょに幸せになるみちで陸上なら列車かバス、海上なら大型客船といふところですか。それがどんなものであるとも知るわけにもゆきませんが、おそらく邪悪と戦つてもこわれない鋼鉄の強さか、反対にどんな抵抗をも排するクラゲみたいな強靱さか、とにかく人間の想像を越えた優秀なものでできているにちがひありません。課題で課題の吟味をすることの

出来る川柳人たちは、自他の整理に事かくことなく、その整理の上になにか加わつてここに生命ある句と表現されるのでありましてここに川柳の醍醐味となるわけでありませぬ。

自分を取りまくいろいろのハコを能動的に自分のものとして、そのハコの利用すべきは利用し、強化すべきは強化してノアの箱船や大乗、小乗のようなしつかりしたものに鍛え上げる腕前を持つ資格をもつた方々が川柳人だろうと思ひます。

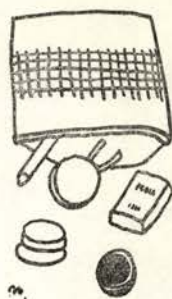
暑さ寒さにも、どんな人生の苦しみに耐えて立派に生き抜く力を養つてもらえるのが川柳道だと心得ておられますが、お互の周囲のかかりをもつハコを雨にも風にも負けないものに仕上げたてたいものです。

川柳はお説教ではありませんが、お説教以上の力をあたえていただいておられます。少くとも私はそう思つてゐるので。

川柳のたのしみは、同時に川柳のくるしみかもしれませぬ。しかし、くるしみとわかつたときに川柳をやめてしまふ人も少くありません、苦しみとわかつたことは進歩した証拠です。そこでくじけずつき進んで下さい。

このことはとくに初心の方に心得ていただきたいことで、日頃講釈ばかりする事をするのを仕事としていますのでついつい道学者みたいなことをいつてしまつて恐縮です。

妻の座



柳 女の世界 (三)

水谷 竹 荘

不平も云わぬ妻だ長生きするならん 路 郎

妻となると、娘時代と違つて乙女の考え方も變つてくる。夫の仕事に左右されるものであるが、また夫の仕事の出来栄をも支配する内助の功といわれる程、しっかりした妻になる女、会社では小さくなつていて、家へ帰ればふんぞり返つて妻の前でいばる夫、それを知つていておだてる妻、いままらオカシクッてあんな亭主にお世辞なんかいえませうかと不愛想な妻が浮気しようといふをしようと不平を云わぬ妻、女の世界も妻となると、色々の生き方があるものである。

今日も亦おんなじ事に妻 鞍 馬
夫より通帳の方を頼つて居 路 郎

新婚の間は爪まで切つてく 路 郎
れ 竹 荘

妻の場合笑顔ばかりもしておれず 宇 柳
男の世界覗く眼鏡はこちら 葎 乃
です

妻と台所

妻の仕事の中で一番大切なのは台所である。子供があれば子供の好きなもの、夫へは、夫の好きなもの、家内中、みんなに喜ばせる料理を作つてゆかなければならぬ、それも毎日變つたものを、安くてうまいもの、栄養と家計の事を考へて、作つてゆく事は妻にとつて並たいていの事ではない。近頃はインスタント食品、冷凍食品が沢山出廻つて、台所の仕事も楽になつたとはいつても、そんなものばかり使つてゐるのは味気ないものであるし、あかれてしまう妻にとつて、夫の朝食の用意をする時が一番女の幸福な時である。なぜなれば、夫の朝食のいらぬ

時は、夫のるす、出張か浮気か、ともかく夫の居ない朝食は妻にとつては味気ない淋しいものであるからである。

台所は女房の智えの出る所 嶺 月

市場寵夫の好きを見逃がさず 竹 荘

客が来てからの台所いい匂い 幼 柳

夫の帰りを待つ妻、夕食に御馳走を作るのにもと、テレビ料理を見まねしてみたいと思つても、

テレビ料理うちにはそんなに鍋はなし 竹 荘

夕方の膳母になり妻になり 銀 砂 子

胡瓜もみ出来て主待つ薄化粧 竹 荘

ともなれば、妻にとつて一番嬉しい家庭平和の時である。

呑んで欲しやめても欲しい 葎 乃

酒を酌ぎ 葎 乃

妻も中年をすぎると、現代は違つたやうになつたが、昔は人生に興味が失つてしまひ、自分を生かすといふことのかわりに、盲目的な献身だけを心にきざんで、只家庭内

の肉身にだけの献身に生きていたものであるが、今では、夫によりかかつて生きてゐるというよりも夫の「収入」の方にだけよりかかつて、その日その日を生きてゐる妻が、現代は多いのではないだろうかと思ふ、今までの日本の家庭は夫婦よりも、子供本位でありすぎたそれがやつと戦後、夫婦本位に變つたやうである。夫婦生活のたのしみを家庭生活にみちあふれさす為の晩酌も、又楽しからずやといふところであらう。

晩酌の膝を劍箱見逃さず 葎 乃

まだ何かないかと晩酌酔うていず 竹 荘

出刃庖丁調に触れたは一年目 葎 乃

晩酌へ今日は得意の小鉢も の 天 祐 子

まだ少し有りますといふ妻の酌 螢 石

夫には七日目に一度の日曜、休みがあるから、朝寝でもして葉々と休めるが、家庭を守る妻に休みがない、そんな時に、妻は「どこかへ行つて、なにかたべたい」夫は、「さあ、なにかうまいもの食わせる家があるかな」とほける

妻と外出

雲 雀

日曜の度にととのう新世帯 路 郎

しゃぶるのをおぎのうてやる共白髪 路 郎

東ね髪して黙々と妻動く 愛 論

つづく

川柳雑誌社特製

一枚の紙にも诗情あふれる

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴) 三〇円
送料(一冊分) 二〇円

ものである。

「うまいものでなくたっていいのよ、今日は台所をやりたいくないのよ」

女房もたまには出たい髪を結び 乾 坤

その気持を察してやつて、一泊旅行位には、伴れて行くのが、女の世界への思いやりというものである。

老妻もはにかむ旅の家族風 竹 荘

妻を倅せにする妄想をひたすらに 伊 佐 緒

奥様は一足おくれ停留場 雲 雀

日曜の度にととのう新世帯 路 郎

しゃぶるのをおぎのうてやる共白髪 路 郎

東ね髪して黙々と妻動く 愛 論

つづく



男娼

奥津啓一朗

男子間に於ける同性愛、所謂男色は奈良朝時代に入り、足利時代に至って武門の間に大に行われたが、併し男娼というものはなかった。

けつ王にはしまりそうな衆道也 (二一・六)

させぬとけつを石にすると弘法 横好 (二二・42)

若衆歌舞伎は戦国時代の余風で男色の流行していた時流に投じて起こったもので江戸では寛永元年に起り、京都ではそれ以前元和三年に起ったといわれている、女歌舞伎が風俗を乱すことが甚だしいので寛永六年禁止されてより若衆歌舞伎は益々盛んになったのである。

風俗を乱したとはいえ、若衆歌舞伎時代には、役者が同性愛を好む男子の相手となっても、ただ意気の投合したもののみ身をまかせたに過ぎず、別に代償は求めなかった。

男色を売るようになったのは、野郎歌舞伎と改称されてより以後

のことである。野郎は即ち芝居役者で一に色子又は舞台子ともいい客の求めに応じて茶屋にでむき娼婦同様になった。御代参ころんで帰るせわしなさ (七・33)

芝居とはそら事女中かげま也 (二九・4) その形りで後家のさじきへ顔を出し (九・26) 後家へ出すかげま老本づかい也 (九・7) 武士や僧侶ばかりでなく、御殿女中とか後家さんにするいふんと重宝がられたものである。川さきへ参るかげまはもふいけず (二二・24) かげまは十三、四から十八、九までの美少年で盛りのすぎた二十五では、の句意女は十九、男は二十五の厄に川崎大師に参詣した。御守殿はかげまをあらためにあわせ (一九・28) バレか句意不明。ばかな事かげまやけさを持つてかけ (二二・28) かげま客尻のしまいのつかぬもの (五・17) 地紙売も売色をしらしい。地かみうりよし町已後はな

どといひ (三・16) 地紙うり芝のやしきでくどかれる (五・4) シャうばいにさわる地紙やのあはた (二四・2) 「嬉遊笑覧」に「江戸は芳町を始めとし、木挽町、湯島天神、麴町天神、塗師町、神田花房町、芝神明前、その他七箇所は天明の末までありし」といひ、「近年(文政頃)は四箇所絶えて、芳町、湯島明神前のみ残れり」とある。よし町のいしゅで本寺にいじめられ (三三・31) よし町は損んだと和尚気がそれる (五・17) よし町でうつはりちぎな和尚也 (六・15) よし町にござるたちかと納所いひ (二五・11) よし町のむかい片手にくつかむり (七・25) よし町は化けそうなのを後家へ出し (三三・21)

よし町のふらち御殿へばつと知れ (三三・30) よし町の客女人とてへだてなし (一九・13) よし町で御菜せん香折れといふ (四・19) よし町でふかく合せた前を明け (二〇・39) よし町へつんつんとしてまかる也 (一七・33) よし町の月はおかまのたんご也 (二八・30) よし町へぞくの行のが末世なり (二二・2) 男娼の流行は初代川柳の在世時代たる宝暦より安永、天明期で天保にはまったく江戸からその姿を消した。戦後上野公園にある西郷さんの銅像のあたりに出没すると聞いたが、高須啞三味さんの話では最近では芝田村町の周辺に夜なよな現れ、それも相当の数にのぼるとのことである。

金泥集

麻生菟乃選

「月」

ナイターへ余分な月が出る	阿茶	遅れた時計で月の出見をそない	一栄	観月会月が眺めたお酒の輪	好女
のぞかれた月へ口止めしたい宵	同	満月へ又憎らしい雲かかり	同	絵日記の月へすすきの葉がとき	同
居残りがこわごわ帰る月の道	同	お月様お笠を召して又も雨	勝子	ふるさとは今宵十五夜盆踊り	女
月が出て虫もすすきも震められる	ささ子	アベックの夜のポートを覗く月	同	二人だけの散歩に月がついて来る	白美
あはかれて月は科学を憎むなり	同	貧しきも富める者にも月無情	美喜	蚊帳の隅おとして月をはめる老	周甫
朝顔と月があいさつして別れ	同	踊りの輪へ月が出た出た月が出た	同	アイシヤドク月に照らされくろくろのよう	美代
もう月はロマンチックなものでなし	清子	月とすつぽんですつぽんの方が先に寝き	あいき		

次回題「急用」切十月末日



一路集

伍 詰

松江梅里選

伍詰に依存してまず共稼ぎ ひと呂し
 伍詰へふと伍切りが拗ねてみせ 祥月
 伍詰が夏バテの身の口に合 孝風
 炎天下伍詰まつりの宣伝カー 涼髪
 伍詰に飽きてグルーブ山を下り どんたく
 伍切りを忘れて責任なすりあい 光郎
 伍詰を食うて叩いて山の歌 専翁
 伍詰も遺影のそばにおいてやり 桂仙
 パイ伍を切らせ切らせでまた噴嘩 旋鳳
 頂上でさて伍切りが見あたら 百万石
 伍ジュネ家旅行が待ち切れず 雄声
 伍詰にされてじいちゃん米寿なり 真奇
 空伍が早瀬に躍る保津下り 八九寸
 伍詰のビールキャンプを唄にする 和三郎
 珍客へ伍詰出して詫びを言 雄々
 伍詰にされて賛否は議決され 隆史
 リンツあわれ伍詰だけが生き残り 惠二朗
 伍詰に明治生れはしたしめず 紀太呂

伍詰の魚は骨ごといただかれ 代住男
 伍詰にされても社長の椅子は業 三佐吉
 この款待伍詰の前提とは知らず 八郎
 伍詰にまかされているピクニック 千翁
 伍詰を使って都会の味を盛り 博友
 伍詰とするめに酔うた地鎮祭 藤波
 伍詰で我慢してねと海は時化 勝子
 パイ伍は産地みてから蓋をあけ 静波
 伍詰で妻抵抗をしている 氣
 伍詰を背負うた友がピリに着き 与太郎
 お見舞に行つて伍詰もろて来る 淀月
 伍詰にすれば秘密を守つた 氣
 伍詰でまかない切れぬ不意の客 同
 産院の留守を伍詰塩昆布 圭井堂
 伍詰で仕出し来るまで繋ながれる 同
 台風がそれて伍詰まだ食わせ 宗太郎
 特売の牛伍しかと念を押し 同
 蟹伍はラベルの姿して居らず 生薑
 伍詰にする気か廊下へデモへたり 同
 伍詰の汁まで吸うて箸を折り 十九平
 伍詰を上手に切つて世帯じみ 同
 空伍の揺れる鳴子を見る案山子 卯之助
 ホームバーまた伍詰を切るのかい 光郎

大臣を伍詰にして座り込み 宗太郎
 伍詰にされて空巢がお手をあげ 文子
 伍詰をぎつちよであげる器用はめ 蛙水
 伍詰の味とコンビの握りめし 和三郎
 空伍ごろごろと山の夏が去に 惠二朗
 警察へ拘換伍詰にして届け 瑞歩
 空伍を惜しげなく捨て世は平和 むじな
 地
 伍詰のいいだこ腹想するが如 惠二朗
 天
 伍詰のパーティーに降る山の星 晃男
 軸
 無器用な男伍詰あけさされ
 アパート
 子の借りたアパート一目見て帰ろ 亭
 アパートの経営養鶏にも似たり みのる
 手を延ばすだけアパート用が足り 和郎
 次々とアパートの晩の声となり 同
 それとなくアパートの合鍵握らされ 一鶴
 アパートのみんな倅せそうな窓 静水
 アパートの噂自家用車が止り 同
 アパートでは愛称アパートでは番号 八九寸
 酒場では愛称アパートでは番号 勝子
 アパートの部屋を電化が狭くさせ 藤波
 アパートに仕立ててペンキ未だ匂い 雄声
 アパートと書かず番地に困るな 雄声
 アパートの子はアパートの子と遊び 圭井堂
 アパートの畳を寝ている夜の蝶 涼髪
 定年も真近かアパートから通い 百万石
 冷蔵庫買わはつたよと知れ渡り 三佐吉

山根白星選



「影法師」

国弘半休

一路集の
選をして

八月号「影法師」の数多い投句の中から、僅か六〇句余りしか抜かないので、厳選と云うことになったかも知れないが、没句中にも平抜き入選以上のものがあることは勿論で、これ等の多くの人たちは自選していないで制限を越えて投句されたためであろう。

座五に影法師をくつつけた句は大體説明に終つてしまつていたので没になったものが多い。併しながら佳作に這入つたものの座五「影法師」には説明以上のものが滲み出ている。こんなところに作句態度があるのではなからうか。

三才の「人」の句は影法師のはかないものであることを「地」の句は秋の澄んだ月夜を「天」の句は更にリズムに乗せて良く「影法師」を表現されていると思つた。

アパートのあそびは主人待てる灯
 アパートに見栄と嫉妬が渦を巻き
 アパートに門限恋愛しめ出され
 アパートの鍵でこころを許し合い
 アパートの廊下に並ぶ出前箱
 アパートの窓にギターが腰を掛け
 アパートの隣りも買うから買うれび
 アパートに馴れてきました市場籠
 アパートと言う名のキリの方に住み
 アパートの隣りせない人が住み
 アパートの窓へ便利な窓があり
 アパートに帰れば母の貌になり
 アパートは近火へみん顔を出し
 訪問の女へ独身寮の鼻
 アパートに住み打ち明ける友がなし
 アパートの物干台に競う見栄
 アパートに住んで人相まで変り

住
 アパートの電話は留守にしてくれず
 アパートを詰める雨の臨時バス
 小説にあるよなアパート見当らず
 アパートの窓へラーター呼びあげる
 アパートを社長が借りて秘書が住み
 アパートは一寸出かける鍵をかけ
 アパートの便りさほめてる狭さ
 アパートを二間使用の管理人
 アパートの隣りもラレ料理する
 新築のアパート家相など問わず
 アパートの灯が順々に消えて更け
 アパートの噂に刑事歩を返えし
 アパートの日曜大工青白し
 海底の魚アパートの棲みこち
 アパートの鍵を預る手内職

主人
 葬式のムードがアパートわいて来ず

圭水 光郎 同 大八洲 同 秀峰 雪美 むじな 恵三朗 宗義 代仕男 生薑 旭峯 好女 辰峰 八九寸 千翁 雄扇 蛙水 宗太郎 光郎 秀峰 雪美 むじな 十九平 同 孝風 惠三朗 代仕男 藤波 雄々

地
 アパートに祭りの寄附はやってこそ
 天
 アパートの静寂を破るガスが洩れ
 軸
 アパートのひんしゆくエタグリジニ知りは知り
 アパートの死角を突いてパパが来る

老人
 老人が音頭取ってる益踊り
 若い気でいる老人をもて余し
 老人と言うレッテルの杖をつき
 老人の夢はかない御世に生き
 文化勲章かくしやくとして遠い耳
 ソ連とは言わず日露の生き残り
 老人ホームめだかみにて寄り集い
 恩給に余生を託しベレー帽
 としよりの悴せなほど呆けてよし
 老人に向く北陸の慰安会
 老人に扱かわれとうない瘦我慢
 眼も耳も酒も米寿は壯者なみ
 老人の愚痴へ老人気がはぐれ
 老人にされて不安が又増える
 此頃の若いもんはとまだ若し
 老化とは知らず薬にたよりすぎ
 もめこへ古老の知恵が巾を持ち
 老人の皺に免じた床柱
 席ゆすて呉れる扱い気に入らず
 孫を抱く笑顔老いを忘れて居
 老人の眼に夕焼はあの世めき
 老人と厭らわれないが世話をやき
 老人になりたくはなし目やに拭く

木村水洞選
 辰峰 保夫 秀峰 晃男 桂仙 清風 光道 野迷路 野呂し みのる 淀月 藤波 八九寸 宗太郎 圭水 涼髪 たけお 孝風 好女 黒天子 幸士 石峰 不酔 雄声

養老院良かった昔をみんな持ち
 老人のひがみ裏口から戻り
 口喧嘩直ぐに老人ホーム聞き
 老人の悴せ我が家で死ぬること
 割切って老人さびしく一人居る
 養老院へ来てから笑いとり戻し
 老人は老人なりの意地で生き
 心とはちぐはぐ目と歯の弱り方
 ホームには老人らしい恋があり
 順番がくる老年を忘れて居
 老人と同情させぬ意地を張り
 敬老会素直な人はよく笑い
 敷かれ放しのまま古稀むかえ
 老人へ花をもたせる黒を持ち
 老人に席ゆずられる長病みの
 子に財布譲って老人らしくなり
 老人をまあまああと床柱
 老人の夢あまりにも寂しすぎ

住
 養老院互いに言えぬ過去を持ち
 老人の日だけ老人らしく居り
 老人はつんぼ棧敷でいる平和
 来客万来年よりの日の養老院
 好きだった頃そのまゝ顔で老い
 老人の孤独植木へ水をやり
 老人の我をたしなめるサロンパス
 仏壇の掃除に老人日を送り
 還暦に呉れた頭巾へ振り向かず
 長生きを祝われ床にいたまま

人
 お互いの癖知り合うて年をとり
 地
 養老院なくさめ合える人ができ
 天
 老夫婦離れ座敷で疾をすえ

宗義 十九平 句念坊 静波 保夫 代仕男 杏花 同 瑞歩 同 専翁 同 鶴 同 同 旭峰 同 同 十九平 施鳳 句念坊 久雄 文子 静波 和三郎 蛙水 圭井堂 保夫 光郎

品質優良
先カワペン
 TACHIKAWA PEN
 ビン画紙
 カワゼム
 カワカワ
 カワカワ
 タチカワ
 タチカワ
 タチカワ

大阪府東区常盤町二丁目十一番地
 立川ペン先株式会社

「アパート」
 山根白星
 アパートを、アパートと詠まれている方が沢山ありました、ステーションをステンシヨ、チケットをテケツ（之はもつとも戦後アメリカ軍が進駐して、発音から言えば、此の方が通じ安い）等々、御年輩の方でしょうか。同想異曲も沢山ありました。技巧に秀れた方を選びました。天の原句「アパートの事件はガスが洩れてくる」を失礼とは思いましたが、少し替えさせて戴きました。集句の中で唯一の句相で捨て難いと思いましたが、



柳一界一展一望

句会

▼本社十月句会(句集「有情」出版記念祝賀)は七日(日)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。爽涼の秋の夜を柳友お誘いの七多数のご出席をお願いする。

▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪府)句会は九月十八日(火)午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪府)は九月二十日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪府)句会は九月二十一日(金)午後五時半から黒田田光堂で開催。▼大阪通信病院句会は九月二十七日(木)午後五時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。

▼川維岡山支部八月例会は八月十八日瞳荘旅館で開催。▼川維篠山支部は句報九十九号を発行した。一号を出す以前に三年間小さいパンフレットを出していた由、百号記念号が待たれる。▼山口県川柳大会は九月二日(日)午前十時から山口市県庁前自治会館三階ホールで開催。▼大阪市文化祭第十四回川柳大会は昭和三十七年十月十三日(土)午後一時から毎日新聞大阪本社講堂で開催。▼川柳文化祭第二十六回京浜川柳大会は十一月三日(文化の日)正午から、新宿区若葉町二ノ九五念寺で開催。兼題、千差万別・人造り・ねんごろ・無責任・白鳥・空腹・嘴・底力、席題四題当日発表、投句は百円封入の上、十月二十五日迄に東京都文京区湯島天神町二ノ一六京浜川柳大会事務所宛。▼盛岡川柳会創立五周年、川柳岩手三十号発行記念岩手県下川柳展は九月十四日から十七日までの四日間盛岡市川徳画廊で開催。▼葦川柳会(島根県)十周年記念句会は十月十四日午後一時から開催。▼岡山鉄道局地区倶楽部文化部主催、秋季川柳大会は十月十三日(土)正午から岡鉄クラブ階上で開催、兼題、食堂車、麦太楼選、定期車、葵丘選、殺人、久米雄選、名刺、正一選、蜜月、蛙柳選。席題三題当日発表、投句は岡山車掌区浜田助役宛。▼第十五回岩手芸術祭参加川柳大会は十月二十一日午前十時から盛岡市公園下岩手教育会館宿泊部で開催、兼題、文化・安全・ファン・手弁当、席題五題当日発表、投句は百円封入の上九月三十日迄に岩手日報社事業部「芸術祭川柳大会」係宛。▼岡田稲人遺曆下北川柳社川内グループ復活三周年記念川柳大会は十月二十八日(日)午前十時半から川内町泉竜寺で開催、兼題、年輪・とんちんかん・燈台・主・神経痛・旅愁・貝・立ち上る、各題三句、投句は

ハガキ大用紙に各題別記の上百円封入、十月十日迄に青森県下北部川内町松山十三方、記念川柳大会係宛。

消息

▼路郎主幹は八月三十一日(金)六時半から毎日新聞大阪会館北館毎日文化ホールで開催された小野十三郎氏詩集・詩論出版記念パーティーに出席同氏の健康と健康を祝福された▼西尾榮氏(八尾市)は八月十八日霧島林田温泉からの便りに、夫人同伴いたわりいたわられつつ指宿、桜島、霧島、日南海岸、別府、阿蘇と、四泊五日の旅行を楽しまれた由、「銀婚のまねごとをして空の旅」▼工藤甲吉氏(青森市)は故小林不浪人句碑建立と句集発行に腐心して居られたが、九月十一日から始まった東奥日報社の社内野球の編集局OB軍の監督として秋の半日を楽しまれた。▼池田可宵氏(長崎市)の川柳のれん展が、九月二十五日から三十日までならば高島屋で開催される。同展に堀風仙洞氏(大阪府)の「一万年筆胸に背広の小唄会」の句ののれんも出品される。

▼山内静水氏(竹原市)は竹原川柳会五周年記念近県川柳大会の準備に大車輪の活躍をされたが、九月九日当日は極めて盛会で努力が報われ胸がいばいになった。大阪から清水白柳、河相す、む、四国からは長野文庫、岡山県から直原七面山、下関から国弘半休の諸氏らが同会に出席された。▼金子吞風氏(信州上田市)から、当地の柳壇は最近活発で、九月には観月句会、川柳忌句会、ブドウ狩句

会、十月二十日には第二回短詩型文学祭を開催催の予定で、一寸した会に四十名位は寄りま

▼清水白柳氏(大阪府)は九月八日所用で尾道へ行き瀬戸田で一泊、九日竹原市の川柳大会に臨まれた。『鯛の味格別という港の灯』

▼小西雄々氏(米子市)は九月川柳雑誌の課題吟選者に推薦されたが一生懸命努力に期待にそいたいと抱負を寄信された。

東野大八著 風流人間横丁

B6型 二五八頁

価250円 送費70円

★異常な競争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバラな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著 詩川柳考

B6型 函入 定価三百八十円 送費九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す。ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る。一凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

若本多久志著 麻生路郎序

川柳親ごころ子心

価150円 送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。掲載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

大阪市住吉局区内万代西五丁目

発行所

川柳雑誌社

振替口座大阪七五五〇

不朽の人々



「お父さん僕の足だけ写しなや」と言っていた長男が写したものの心臓肥大と診断されあちこちに故障が次々と起り最近脚氣を併発一、二カ月の間に六疋程体重がへった衰弱はなほだしく何をすることも時間がかかります。この写真はもっとも弱り込んでくる時のもの出来るだけ元気そうなものを選んで山程の好きな道、療養二年一進一退しかし斗志と情熱のある限り全快を信じています。

痛む足でふみしめて見るわが大地

(東岸)

▼阿部佐保蘭氏(東京都)は夫人同伴長野の善光寺に参詣傍々、八月二十五日には松本市の石曾根民郎氏を訪問、二十六日には湯田中温泉に遊び中島繁邦郎氏と歓談された。▼酒井勲人氏(東京都)は八月十日次男が結婚をされたので、その後は暑さを忘れる程の多忙であった。▼水松東岸氏(岡山県)は心臓病のため療養中であるが、暑さのため衰弱が一層はげしく涼しくなったらとそればかり望んでいます。病状は好転している様には思われません。▼橋高薫風子氏(大阪市)は句集「有情」発刊の過労のため八月下旬発熱、しばらく阪大病院へ通院治療される。▼丸尾潮花氏(高槻市)は定年退職まであと九カ月と思うと毎日の暑さが一入身に伝えますが、そろそろ身の振り方も考えながら、一方舞踊の稽古に生甲斐を感じ励んでいます。▼山田季贊氏(高槻市)は八月十九日と二十日の両日、子息等の夏休の無心を避えて、山口県の秋芳洞と、関門トンネル下関水族館を見物された。「子供等と秋芳洞のよさを賞め」▼小田無限氏(福岡県)は四月五日公務で上京上洛の機会があったにも拘らず、お会いする暇を見出すことが出来ず海に残念に思っています。▼安岡珊枝郎氏(大阪市)は大阪市の近郊箕面で高血圧症の療養をされているが、日増しに元気を回復、「大相撲三場所寝て見て起き上り」の余裕ある心境になって居られる。▼島田兼孝氏(大洲市)は九月十三日札幌市で開かれる第十一回全国更生保護大会で更生保護功労者として法務大臣から表彰された。▼越智一水氏(今治市)は川維九月号を拝読、「十和田湖よみな酒になれ旅人へ」の名句を声に出し繰り返し読みました。名句は作句への情熱を湧き立たせるものです。▼河本南牛史氏(松山市)は愛媛県警

察本部からの交通安全川柳募集に応募、愛媛国立療養所の第二回川柳作品集の選を受諾、二十日、二十一日は、「吹きまくれ川柳台風なら嬉し」といった具合に過ぎました。▼江国幽谷氏(岡山市)は痔の手術のため入院されたが、全治退院された。又、岡山電報局から、津山市津山電報電話局電報課長に榮転された。宅は従前通り岡山市。▼河相すむ氏(西宮市)は九月九日竹原川柳会主催の第五回近県川柳大会に出席、閉会後宿舍の三井保健会館で竹原川柳会、三井鉱山川柳会、ふあうすと旅の会々員諸氏と歓談、静水氏とは喫茶店で夜の十一時過ぎまで談合された。翌十日に郷里福山で墓参、十一日帰阪された。▼西尾榮氏(八尾市)は従来曙川食糧工業所を發展解消し、九月一日から新たに七宝製菓株式会社を設立、取締役社長に就任された。又、業界紙に川柳欄を設け川柳を

大いにPKされることになった。▼長野文庫氏(今治市)は九月九日竹原の川柳大会に出席、隣り合わせた直原七面山氏と交歓されたが、汽車の都合で帰途を急ぎ、清水白柳氏ほか遠来の柳人諸氏と話し合えなかつたのが残念であったと寄信された。

句集・柳書

▼橋高薫風子著、川柳句集「有情」が昭和三十七年九月二十三日、川柳雑誌社から発刊された。著者六年半の作品四百八十七句が収録してある。川維叢書B列6型百六十六頁、価二百五十円。▼野春三著「現代川柳への理解」が昭和三十七年八月十五日、大阪府此花区春日出町三百十九河野方天馬発行所から発刊された。今年が還暦に当る著者の長年に亘るエッセイをあらかじめテーマに当てはめて生かしたものが、極めて沢山の現代川柳作品をも採録しており、何よりも判り易い文体であり、新津市秋葉。

転居・新居

▼伊集院良氏(大阪市)は大阪市大正区鶴町二ノ八一久保田宅七号館へ転居。▼大野風柳氏(新津市)は新居を左記にかまえて移られた。個人宛以外の通信は従前通り。新津市秋葉。

不朽洞会から

★すっかり爽やかな秋となった。お互いに作句に精進して、不朽洞会の意気を盛りあげたいものである。いろんな理由で句から遠ざかっている人達のハッパンを望む次第だ。(多)

★新会員紹介 九月

▼木村涼人(青森県) 正 甲吉氏推薦

▼城 一舟(堺市) 正 正

▼牛島水京(大阪市) 正 正

▼唐崎尊翁(大阪市) 正 梅宏子氏推薦

▼奥谷弘朗(倉吉市) 正 日満氏推薦

▼唐崎尊翁(大阪市) 正 梅宏子氏推薦

▼奥谷弘朗(倉吉市) 正 日満氏推薦

俳句と川柳



八木摩天郎

十七音の詩はすべて俳句であり得るのみならず、詩ではない五七五十七音短章にも俳句性があると考える。たとえば
咳一つきこえぬなかを天皇旗 劍花坊

には勿論のこと（これは厳然として一つの短詩である。川柳が尽く詩の圏外に在るといふ風な考え方は妙くともアップ・ツー・デートではない）
生き物のやうにとらへる心太
にも、進んでは
この十手に登るべからず警視庁

にも俳句性はある。
俳句性というものは、そのみで俳句を特質づける唯一の性格ではない、俳句性は俳句にのみ存するものではない。五七五十七音の短章には凡て俳句性は潜んでいる。だから、俳句性とは五七五定型の別称でしかあり得ない。
俳句とは俳句性を有する詩である。俳句性の最も本来的な面目は俳句に在る。川柳とは俳句性を有する詩、または非詩である。

この二つのものは全く形式を同じうする文芸である。この二つを区別するものは、内容のみであって、形式では絶対にあり得ない。昔はそのスタイルによって略々之を区別することが出来たが、現在ではスタイルの混淆が著しいから、これによる区別は甚だ困難である。不可能に近いといつてもいいだろう。

季——季語、季感——の有無は純粹に内容の問題に属するから、この場合俳句性には何の関するところもない。

要之、俳句性とは俳句を文芸の他の諸形式から区別する特性である。従つてまた俳句と形式を同じくする川柳を文芸の他の諸形式から区別する特性である。この場合、その形式に属する限り、俳句と

俳人日野草城が、かつてその父、日野静山翁に、草城の主宰する俳句雑誌「旗艦」を毎月贈呈されて居られたのを一括して、静山翁夫妻がその旗艦を私に下さった事がある。その頃は別に俳誌には目を通さなかつたが、最近草城研究者や、草城敬愛者の参考に資料を提供する為め色々資料を漁るうちに同誌に草城が川柳論に触れているので面白く読んだ。勿論草城と私は、二つ三つの頃からの遊び友達であるが、草城から俳句や川柳に就いて別に話を聞かなかつたが、その草城の川柳観と云うのは左の如くである。

僕も、昔は、俳句性というものは五七五定型と季との二つにあるものと信じて疑わなかつた。つい先だつて迄、そう一途に思い込んでいた。定型と季とを不可分離のもののように信じ切つていたのである。然し、言うまでもなく、現在は異つた考えを持つてゐる。

川柳不朽洞会

(十月)

指導

麻生路郎

賛助

長谷川一徹

中田守雄

白川朋吉

中村祐吉

田中辰二

岩崎愛二

中村直勝

麻生磯次

井上吉次郎

島浦精二

恒藤恭

洞友

田村孝之介

山本雨迷

山路閑古

柴谷宰二郎

麻生葭乃

橋本緑雨

高鷺亜純

沢田四郎作

東野大八

中島紫痴郎

戸倉普天

奥村丹路

不朽洞会員

特別会員

中島生々庵

上田翠光

木村孤浪

戸田古方

西尾 乘

市場没食子

土井文蝶

若本多久志

川村好郎

松江梅里

正本水客

黒川紫香

丸尾潮花

小西無鬼

西 いわを

八木摩天郎

北川春巢

寺井鏡々

古川麗花

前山北海

三輪峯園

大坂形水

井上湧三

西垣錦風

築山快夢起

市岡暁舟

藤本満年

羽佐間柳葉

福田妄夢

吉田圭开堂

西森花村

河村日満

足立春雄

榎南夏六

石川侃流洞

安岡珊枝郎

牟田一哲

河村瑞川

木村千容

田垣方大

野村味平

木村水洞

福田丁路

真鍋一瓢

佐野白水

後藤梅志

平尾太希志

木口賀峰

小西雄々

菊田いさむ

山阿茶

岩崎一伸

金開文秋

伊藤茶仏

那谷光郎

中島小石

福井野迷路

大西八歩

新川博也

徳永雅美

小川恒明

清水白柳

尼緑之助

木谷竹莊

弘津柳慶

杉谷湖山

増田耕民

佐野史占

小沢喜由

大鶴喜由

野本喜由

小野喜由

野本喜由

小野喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

野本喜由

生理めの息苦しきだ肺を病めば
山雨楼
病葉の目につく日なり咳はげし

言い様のない寂寥そ妻の留守
夢裡
と、その悲痛なる心境を吐露して詠れて
いるのと大体同じである。草城が、かつ

春暁や人こそ知らね樹々の雨
きさらぎの藪にひびける早瀬かな
ほがらかに鶯啼きぬ風の中
ところてん煙の如く沈み居り

塵取をこぼるる塵や秋の暮
などと作句した頃の句と、之れが同一の
作者の句かと思えない程に、病床吟は川
柳句に近い句が生れている。これ等の句
について文芸評論家山本健吉氏は、草城
の病床句について、こういう句になると
季語があるとかを越えて、この天真爛漫
の心情の吐露に、何も附け加うべき言葉
を見出し得ない。ある点では子規の病中
吟に似ている。無技巧の技巧と言っても
よいが、それは拙いではなくて飽くま
でも才人草城が到達した至境なのである
と書き添えている。「無技巧の技巧」の
大切な事は、路郎先生も屢々我々に説
かれていた所である。

要之、川柳も俳句も(季語のない)真
実味の溢れた、人間感情をその環境に依
って、そのままを句に纏込んだら、同じ
五七五十七字詩型であるだけに、俳句、
川柳の両者は一線を画し得ない位の句が
生れるのでは無かろうかと思う。俳句も
「季節感がなくても詩である」という俳壇
になりつつある現状に鑑み将来は、俳句
と川柳とは全く一つのものとなる時があ
るのではないかとさえ私は思うのである

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自傳の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(162) 牟田一哲

- (一) 牟田哲三郎 (二) 哲三
- (四) 大阪市南区末吉橋通二の十二 (五) 明治24年11月14日 (六) 佐賀県小城市 (七) 医師。耳鼻咽喉科 (八) 大阪 (261) 五〇〇 (九) 入院 三三三七 (自宅) (一〇) 入学へ悲喜交々の暮し向き (一一) 読書、観劇 (一二) 有
- (二二) 昭和二十年二月

(163) 堀風仙洞

- (一) 堀文四郎 (二) 風仙洞
- (四) 大阪市天王寺区舟橋町七五 (五) 明治23年12月13日 (六) 田辺市 (七) 会社重役 (八) 61 (二五九八) (九) いつの世も母は消し役灯し役 (一〇) 益哉、書道、小唄 (一一) ナシ (一二) 昭和二十二年

(164) 辻圭水

- (一) 辻圭宏 (二) 圭水 (三)

- (四) 堺市榎元町二九九九 (五) 大正14年3月2日 (六) 和歌山市山吹丁一 (七) 南海電鉄社員 (八) (九) もう船が見えぬテープ持ったまま (一〇) (一一) 有
- (二二) 昭和二十八年

(165) 小浜牧人

- (一) 小浜正一 (二) 牧人 (三)
- (四) 西宮市甲子園四番町四〇 (五) 明治44年9月27日 (六) 愛媛県砥部町 (七) 真珠・寶石商
- (八) 西宮41三九四八・大阪41一四三一 (九) 辛口を好んで男盛りなり (一〇) 陶磁器鑑賞 (一一) 有 (一二) 昭和十二年十一月

(166) 酒井ひか平

- (一) 酒井利光 (二) ひか平 (三)
- (四) 兵庫県多紀郡篠山町上二階町一〇〇 (五) 大正7年8月10日 (六) 兵庫県多紀郡篠山町上二階町一〇〇 (七) 会社員 (八) (九) 頑として牛はゆっくり用を足し (一〇) 郷土史研究と立抗焼 (一一) 有 (一二) 川雑投句昭和二十六年四月

★五月号現代柳人録(134)は
深田治郎は(じろう)とルビーを
訂正。

秋机雑感

不二田一三夫



★新6選
発表表★
例年のと
おり九月
の川柳忌
句会で、
路郎主幹
からつぎ
の6選者
が新しく
発表され
た。傍島
静馬・小
西雄々・
藤井明朗

月六日に負傷してそれがス
トップされた。出羽ノ海部
屋の幕内力士大晃が、十九
年夏場所の序ノ口から今日
まで九百七十回を越し来春
場所では千回になるようだ
連続出席というものは身
は健康で家は田満でなけれ
ば達成できないのではない
か。「めしより好き」とい
う人へのみ連続出席がある
ようである。

・石倉旅風・河相す・む
・内藤さき子の諸氏だ。雄々
氏は米子で新聞柳壇等の選
者として、また明朗氏は木
次でそれぞれ川雑支部長の
重任にあり当然新選者に推
せんされる人だった。旅風
・さき子両氏は柳歴も古く
す、む氏は中堅クラスの優
等生でこの人ほど柳書を読
破している人はちょっとす
くないのではないか。
サテ静馬氏だが、いよいよ
よあと二カ月ほどで連続九
年間全出席という大記録が
達成されるのである。文学
と全出席を結びつけるわけ
ではないが、六十才を越し
て神戸からの連続九年全出
席はその努力のほどもうか
がえるというものである。
タイガースの三宅秀史三
塁手が八八二試合連続出場
の記録を持っていたが、九

★九月の不朽潤賞杯獲得者
天正みさ子さん★
九月の本社句会で堂々不
朽潤賞の栄光にかがやいた
女流作家があった。聞きな
れない柳名に幹事もちよっ
とマゴついたかたわらだっ
た。天正みさ子さんの名が
クローズアップされたわけ
だが、川雑句会には七月の
川柳まつりがはじめての出
席だった。誰に誘われたの
でもなく、新聞の広告を見
てのことだった。
七月には全没らしく、第
二回目の八月句会では一句
だけより抜けていないらし
いが、それでも三回目の川
柳忌句会には堂々の最優秀
句を発表されたのである。
七、八月の二カ月に一句よ
り抜けなかったのに、腰を
折らなかつたファイトには
何か教えられるものがある
ではないか。まごころを句
箋にたたきこめ、ボクはこ
う教えられた。

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 九月句会 (大阪市)

9月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

きびしい暑さだ、この暑さを一瞬ふつとばすところに川柳味があるようだ。佳句はときによって涼風ともなるようで、耳をかたむけるところ、汗もさわやかにひいていくようである。

毎年九月の川柳忌句会には、新しく選者が誕生していくが、こしは実に六人の新選者が路郎主幹から発表された。日頃の精進が実ったことは同慶のきわみである。おめでとう。

傍島静馬・小西雄々・藤井明朗・石倉旅風・河相す・む・内藤ささ子諸氏の今後の活躍へ満場拍手をもって祝った。

今月の柳話には医博、生々庵副主幹がホルモンと題して熱弁をふるわれた(本誌14ページ参照)さすがにお手のものだけに聞かれわれも興味深い。

十月は7日が本社句会、13日(土)が大阪市民川柳大会である。柳友諸氏の総参加をお願いします。

川柳忌といふこの九月句会に堂々不朽洞賞杯を獲得された人、新屋天正みさ子

さんの出現にアッと満場息をのむ。新しい泉のわくところ川権の力はますます水速の流れを誇るのだ (F)

出席者—路郎・静馬・黙平・八郎・和郎・圭水・柳宏子・圭井堂・いさむ・玲人・清風・専翁・文蝶・判志・舟遊・摩太郎・雄声・文秋・水京・正一・奈良子・白美・生々庵・凡子・多久志・古方・水客・晃・種雄・一瓢・庸佑・与呂志・行人・いわを・す・む・好郎・女・静幸・敬太・竹荘・榮・数子・南宗・薫風子・阿茶・一三夫・野迷路・小松園・あいき・紫香・清人・進之助・白柳・みさ子・三司・季費・梅里・梅志・宏子・腹乃

兼題「空白」 麻生路郎選

空白なくらしテレビのまにに生き 光道
真打の遅刻理める 手品出る 八九寸
空白の個所に教師は疑問もち 計光
終戦の空白もうけそねたり 句念坊
未亡人その空白へ寒ういる 一三夫
斗病七年この空白に我ながら 摩天郎
長すぎた空白人までかえさせる 水京
夫婦とい名で心の穴を持ち続け 水客
追放をされてるうちに箔ができ 圭水
あたら青春空白にした負け戦争 圭水
空白の間は肚を探り合い いさむ
ブランドを知って長距離電話来る 文秋
以下余白代書一枚分で取り 文秋
空白のポスト大物出る 葵
空白も金であつたりかたがつき みさ子
日誌もう空白のままハネムーン 好郎
空白を黙って耐えてくれた妻 清風
砲煙の中へ青春置き忘れ 晃
日記空白紙のなかつた日もあつた 古方
空白が辛抱だった椅子につき 好郎

斗病の空白五年が他人にし あいき
絵面の空白この山が生き 宏子
空白をおぎなうべしで穴をあけ みさ子

兼題「骨」 菊沢小松園選

バラバラの骨で捜査が頭うち 照児
骨と皮の脚を羨む娘を叱り 八九寸
入社試験骨のある奴あともわし 野迷路
骨おしめせぬ気性で損をする 季費
恨みたる日もあり姑の骨拾う 光道
夏やせの昼寝の父の肋骨 阿茶
骨ぐるみ食うて年寄り憎まれる 一瓢
退職金もう節々の痛むころ 梅志
蜜骨をいっそ女にもてており 榮
末っ子が骨立てたから皆あわて 凡子
小遣いを取られ老骨いたわられ 静馬
せめて骨故郷へ埋める気で帰り 一三夫
先代から惜まぬ骨身けむがられ 生薑
のど仏箸でつまんで見せてくれ 梅里
はもの骨ここで生まれ死ぬつもり 水客
骨埋めるつもりと社長見逃がさず 正一
骨と皮になつても迎え来ぬまに 奈良子
のどに骨立てて叱言まだつづけ 三司
骨にまで泌みた意見を忘れかけ 玲人
よろめいたうを消すに骨が折れ 正一
骨拾う身内もないに金を貯め 文蝶
ケチンポで一生活した土性骨 生薑
骨壺を抱いてるお方が師範代 摩天郎
親不孝わびてお骨でもどつて来 あいき
遺言を故郷へ果す壺をさげ 進之助
拾つて骨から小言まだ出そう 和郎
忘れ物の遺言を貰う恥しさ 阿茶
骨のあるさかなは食べぬ子に育ち 庸佑
抱きおうた白骨のまま検屍され 一三夫
政治家の骨もやっばり白かつた どんたく
見上ぐれば招くが如し骨仏 小松園

兼題「替え玉」 西 いわを選

声替えて応対してる 電話口 八九寸
替え玉がうかつに出した国訛り 山椒坊
名優に似て替え玉の役ばかり どんたく
替え玉の札へ博文ひげ買われ 生薑
替え玉の方が受けてるアンコール 一瓢
替え玉の印を押す手のちと震え 文蝶
替え玉を意識している眼のつかい 凡子
金を渡してから替え玉だとわかれ 白柳
颯爽と来て替え玉は縛につき 三司
替え玉に出たはずの娘が映らない 静馬
替え玉に来てホントウの恋となり 榮
愛さきょうの替え玉本気におう出し 敬太
よく似てる顔が替え玉頼まれる 竹荘
替え玉で刑終えて出て箔がつき あいき
替え玉を勤めてつらい役と知り 正一
トリックは替え玉だった早がわり 一三夫
その筋の六感替え玉見破られ 進之助
替え玉が悠然として縛につき 晃
替え玉が馬から落ちて金になり 南宗
替え玉がばればせぬかと落着けず 静光
替え玉がばれたと知らず調子よし 柳宏子
替え玉の方がなんでも上手なり 逸名
替え玉にされた男の低い知恵 玲人
替え玉というアリアビで浮気もし 凡子
替え玉は替え玉らしい汗をかき 一三夫
本物が出て来て替え玉かしこまり 多久志

兼題「ホルモン」 黒川紫香選

ホルモンの過剰まばらな厚化粧 光道
夏やせへホルモン料理進められ 季費
肌あれをホルモン不足とひやかされ 計光
ホルモンの主へはおえましい噂 八九寸
ホルモンの効能書がお気に召し 野迷路
ホルモンが目につき出した更年期 句楽坊

ホルモンを取れとのれんへ妻を連れ
 ホルモンやりなはれと老婆すすめ
 一べんでホルモン剤の名をおぼえ
 ホルモンでも食うて来たんかついてる
 ホルモンのかたまりが来て話つけ
 ホルモンで酔いアリアンで手を叩き
 べんちやらも言わすホルモンようはやり
 ホルモン薬に頼りすぎてる更年期
 ハイティーンホルモン焼をそつと食べ
 ホルモンが足らんのやらかとはあつかまし
 人を待たしてホルモンの注射から帰り
 思わくがあるのでホルモン余けい食べ
 ホルモンがどうだごうだと社長室
 ホルモンの方で慌てる子 沢山
 ホルモンを射つて奥さん倦怠期
 ホルモンがちと効きすぎた御乱行
 ホルモンを頼りに残り火を燃やし
 自動車も徐行ホルモン匂う街
 ホルモン屋の女房でいてよう産ます
 ホルモンの足らぬ男がつきまとい
 齡の差がもうホルモンで追いつかず
 ホルモンの匂い易者も腹が減り
 ホルモンの効能書を信じ切り
 誘われた方がホルモン好きになり
 ホルモンが利いて本妻淋しがり
 男娼が来てホルモン屋派手になり
 ホルモンや女ののりけ聞いて焼き
 ホルモンのせいだと女医はさりげなく
 ホルモンで肩書のない話する
 煙一ぱいにホルモン焼けてくる
 ホルモンをとって人生まだ楽し
 席題「抜け道」 川村好郎選

抜け道があるよと先輩らしい顔
 抜け道の当てがはずれた知能犯
 抜け道を教えた方が捕まっつて
 六法をかじりすれすれの線を描き
 税務署の裏かく裏を考える
 弁護士の言う抜け道へ金を積み
 落武者に露がわびしい山伝い
 抜け道を教えてもろてきた寝酒
 抜け道を知ってる税吏雇い入れ
 汚職にも抜け道があるおえら方
 抜け道がここにもあった密輸船
 抜け道がうまく労働委員長
 一徹な父抜け道へ眼をふさぎ
 抜け道を知ってはいても金がなし
 抜け道を市会議員に聞きにい
 抜け道を知らぬ正直あわれまれ
 抜け道はないでもないが匂わされ
 抜け道へうなずくだけの人でよし
 周到の抜け道税吏ふれてこず
 席題「出好き」 傍島静馬選

めし時に出好ききつち戻つて来
 おばあちゃんお寺参りという出好き
 出好き今日隣の用もことずかり
 二三日出ないと息がつまつてき
 行くことがなげりや近所に居る出好き
 電話でもすむのになら出向いて来
 声変わり母が気になる出好きの娘
 あちこちに出好き不義理な借りが出来
 席題「ハンカチ」 河相すゝむ選

ハンカチを洗って芝生に窓があり
 惜し気なく新しいハンカチ敷くデート
 ハンカチに包まれ小がに海を去り
 ハンカチで拭いた機転を認められ
 ハンサムの前にはハンカチ持ち
 汗を拭くハンカチだけは別に持ち
 ハンカチを裂いた血止めが縁となり
 ハンカチに故人の好いた香のこり
 ハンカチを色分けして日を替える
 アクセサリーだけのハンカチのぞかせて
 ハンカチを洗い女房に恩を被せ
 ハンカチを畳む養子の癖がつき
 ハンカチの新しいハンカチも馴れて
 ほんとうにふくハンカチをもう一つ
 きたなそに車掌ハンカチ拾うてやり
 ほくらある方へハンカチよく動き
 新入児ま聞くハンカチ胸にとめ
 プロボーズ面白いハンカチはもてあそび
 しあわせなハンカチ彼女に貰われる
 泣きじやくりしてハンカチを折りたたみ
 ハンカチに見おぼえないイニシアル
 ハンカチで叩いて女給うまく逃げ
 ハンカチの変などこから万国旗
 ハンカチが僕とあなたの汗を吸う
 ハンカチを女たんだままの汗
 ハンカチを出して汗を拭きたま
 ハンカチを首にセールス急ぎ足

奈良子 句念坊
 水京 正一
 すすむ 栄
 進之助 栄
 与呂志 凡子
 みさ子 柳宏子
 水客 静幸
 圭水 一瓢
 多久志 奈良子
 文秋 八郎
 水客 文秋
 清風 凡子
 奈良子 専翁
 竹荘 竹荘
 水客 水客
 白柳 紫香
 文蝶 静馬
 専翁 専翁
 奈良子 奈良子
 一三夫 一三夫
 和郎 和郎
 雄声 雄声
 敬太 敬太
 文秋 文秋
 逸名 逸名
 進之助 進之助
 阿茶 阿茶
 静馬 静馬
 梅里 梅里
 一瓢 一瓢
 阿茶 阿茶
 和郎 和郎
 雄声 雄声
 静馬 静馬
 水客 水客
 好郎 好郎
 野迷路 野迷路
 南宗 南宗
 庸佑 庸佑
 奈良子 奈良子
 阿茶 阿茶
 清人 清人
 生々庵 生々庵
 静幸 静幸
 専翁 専翁
 好郎 好郎
 奈良子 奈良子
 多久志 多久志
 竹荘 竹荘
 南宗 南宗
 文秋 文秋
 摩太郎 摩太郎
 白柳 白柳
 静馬 静馬
 静馬 静馬
 柳宏子 柳宏子
 水客 水客
 圭水 圭水
 静馬 静馬
 南宗 南宗
 一三夫 一三夫
 専翁 専翁
 いわを いわを
 黙平 黙平
 いわを いわを
 文蝶 文蝶
 古方 古方
 静馬 静馬
 摩太郎 摩太郎
 数子 数子
 多久志 多久志
 雄声 雄声
 摩太郎 摩太郎
 栄 栄
 好郎 好郎
 摩太郎 摩太郎
 舟遊 舟遊
 梅志 梅志
 舟遊 舟遊
 清人 清人
 奈良子 奈良子
 奈良子 奈良子
 静馬 静馬
 文秋 文秋
 多久志 多久志
 恒明 恒明

川雑 阿倍野支部句会 (大阪市)
 金井文秋報

37年度全出席者 (九月現在)
 和男・圭井堂・一三夫・文秋・清風
 ・すゝむ・柳宏子・薫風子・庸佑
 ・静馬・生々庵・舟遊・梅里・阿茶
 ・雄声・いわを・季賛・宏子・腹乃

天位受賞者
 ①水客②文秋・生々庵③圭井堂・一
 瓢・晃④三司・圭水・好郎・静馬・
 一三夫・恒明・進之助・多久志・白
 柳・①客遊子・雄声・庸佑・柳志
 ・阿茶・榮・和郎・梅里・正一・舟遊
 ・いさむ・みさ子・どんたく・奈良
 子

不朽洞賞杯受賞者
 ②圭井堂①圭水・一瓢・静馬・文秋
 ・多久志・恒明・みさ子

ハンカチの白さが残る別れの日 奈良子
 イニシアルを組むハンカチの幸折る 奈良子
 ハンカチを毎日替えるひとり者 すゝむ
 (庸佑清記)

ビィチパラン他人は寄せぬ姿なり
 共稼ぎ次第に染まるフエミニスト
 フエミニスト家では別な顔を持ち
 フエミニストじゃないが藤原あきへ入れ
 フエミニスト女性心理を知りつくし
 前歴はともかくバーのニューフェイス
 ニューフェイスを巻いて呉がつかれ
 ニューフェイスを巻いて呉がつかれ
 ニューフェイスを巻いて呉がつかれ
 宣言費倒れになったニューフェイス
 ニューフェイスも縄張り巻き込まれ
 ニューフェイスも縄張り巻き込まれ
 ニューフェイスも縄張り巻き込まれ
 舞台度胸も堂に入り
 白柳

川維 玉造支部句会 (大阪市)
 西出一栄報

大花火昔の声を妻も出し 正一
 手に汗を仕掛花火のフイナール 眉水
 すだれ越しすこいグラマー見てとろり 城東
 すだれ越しすこいグラマー見てとろり 井平
 すだれ越しすこいグラマー見てとろり 東
 箱庭の此処へ噴水つきたい子 珠笑
 噴水へ化石のように立った驚 文秋
 終幕の拍手でハッと目がさめる 喜久堂
 居眠りの母さん針をもったまま 宇佐夫
 居眠れぬ場所と思えば尚眠し 一栄
 居眠りへソツと敷道りを寄せてやり 柳宏子
 色白の素肌を夏の虫も好き 清子
 女とは素肌になると乳を抱き 風仙洞
 おしほりへ顔をうずめて生きかえり 柳宏子

母親の用事が増えた夏休み 水洞
 夏休み親の心配一つ増え 句念坊
 病休がテレビに映る甲子園 東洋男
 標準語僻地ぐらしへくずれて来 一鶴
 外人の方が確かな標準語 花村

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)
 築山快夢起報

素人の芝居一杯飲んでやり あき坊
 どう見ても素人でない腰の線 拝山
 父の芸はめられる度下手になり 美潮
 置いて来た子の泣声が耳につき 細香
 素人もインスタントで用を足し 青風
 未練満々風向きを待つ気なり 平八郎
 素人の域を脱けての舞扇 泉水
 断ち切れぬ未練残してテップ切り 内海
 伴奏があるので素人唄われず 暁舟
 情熱の恋の未練が乾き初め 柳葉
 素人の手当たらうと敷が言う 笑有
 男だと知ってはいても出る未練 よ志子
 レイ掛けして握手してまで泣いていた 紅茶
 素人は素人同士の気焰吐き 紅溪
 あぶなげに酌いだ女給の国訛り 斧平
 易者より素人の感よく当り 静杉
 祖国への未練がのこる観光団 静紀
 ロケーション土地の素人も役があり 須磨子
 素人の手品あわてて手がもつれ 弦月
 馬乗りは素人らしい鞍が浮き 緑星
 素人でなかつた酒の酔きっぷり 浅太
 誘惑と知りつつ未練たぢきぶれず 万里歩
 振向けば未練が残るエヤポート 萩路
 捨てた人へ未練がふり向かせ カロ女
 女人も既足ですわと煽るとき エス子
 まだ未練あるらし鈍子ふって見る 快夢起

川維 京都支部句会 (京都市)
 田中鳥雀報

ポーフラのように汚染をどどてる 紅鳥
 田が売れてからを都会の灯になじみ 和三郎
 手洗鉢あふれて雷雨遠くなり つる子
 手水鉢金魚の住家とはなりぬ 親生
 忍びよる秋を知ってる手水鉢 鳥雀

湯上りを濃艶にする青すだれ 生薑
 どしゃぶりに祭ははげれる色ばかり 紫蘭
 オルガンをひいて祭を楽しみます 司郎

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

10月号発売中 150円(〒18円)

特集

1. インスタント食品特集(2)
2. 何でも喰ってやろう(座談会)

◆ 検査生理 ◆ 衛生管理

◆ 官場品質 ◆ 食品工品

◆ 食食品 ◆ 食食品

◆ 海外ニュース ◆ 特許ニュース
 ◆ 意匠ニュース ◆ 商標ニュース

〔展望台〕 主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

川維 宇部支部句会 (宇部市)
 津秋六花報

繩のれん江戸ッ子だと云う毒刺の味 万年青
 繩張つてこから向うは売った土地 六花
 繩飛びを麻痺の子さむしい縄で見上げ 実男
 繩ばしご火事の恐怖がさめやらす 千里
 梱包の繩に新米あややつられ 生薑
 変装で出るポケットにある捕縄 吳浪
 新しい繩架転の荷を造る 南風
 安全でなかつた非常縄ばしご 佐吉
 身のあかし立つて縄目の恥に耐え 弘道
 繩をなう苦勞知らぬが切つて捨て 豊年

川維 米子支部句会 (米子市)
 小西雄々報

無理するな無理をするなと共稼ぎ 鶴丸
 垣一重障りの職業まだ知らず 無隈
 ベレー帽ぬげばなんでもない男 一机

公約はさっぱり忘れてパツッ付け
 ナイターの話題で朝の更衣室 雄々
 ビヤガーデン女土の笑い声 天邪鬼
 大臣の椅子が派閥へ割りふられ 詩郎
 米価より水着の値段が氣にかり 一保
 男など蹴飛ばす型でどどり抜き 布堂
 貧乏の気楽さき月を入れて寝る 明甫
 紋服は氏子総代夏祭り 怪山
 淋しさを同情しあつてまだ他人 まさよ
 ムード呼ぶ若いリズムに合せてる 忠之
 救急車は年中無休の忙しさ 雨宵
 お隣りへ遠慮している痴話喧嘩 典女
 浮気するつもりが遂に情死行 ユリ子
 引越して隣りへ低く顔を出し 素瓢
 金のない生活浮気へ目もくれず 明朗

雑 川土佐支部句会

(高知市)

川竹松風報

アリバイは自由出張先きの恋 利子
 アリバイに困り悪友つれて飲み 古城
 アリバイは午前〇時に縮られる 斐山
 アリバイの方も弁護士に教えられ 津洋
 アリバイへ明かるとみに出た情事 温夫
 なぎさだけ歩いて水着の夏がすみ 寛
 水腕ふと水着の夢を崩し去に 天花
 ウインドの水着が夏の気分にし 十面子
 肩書きの方を信用して飲まし 海鳥
 肩いからせて少年の真実さ 大柳
 肩の荷を下ろしてからの 小商 松風
 ふちの無い眼鏡嫌味な紳士ぶり 義夫
 子の重み増す羨しみの馬となり 竹比呂
 学園を求人難がまたみだし 山里

雑 川岡山支部句会

(岡山市)

浜田久米雄報

何代も使った辞書を大事がり 博友
 豊年とは何ぞやと辞書を引き 飴ん坊

浪人の野良働きが辞書をもち 英夫
 大学を出てもやっぱ辞書が要り 哲郎
 字引まではこりかむった三代目 鮫虎狼
 啄木の気持ちは辞書にない説き 淡木
 辞書にない漢字はかきで書いておき 佐加恵
 老眼を嘲けるようなコンサイス 九坡
 我が辞書は不可能の字も書いてあり らんる
 心得て辞書は老眼鏡を添え 宗義
 辞書出して見たが二人ともちがい 容峯
 辞書に未練引いていたのにも忘れ 胡風
 日本語はやはりむつかし辞書をひく 秋月
 辞書にない字を平然と書いておき 久米雄

大阪通信病院川柳会

(大阪市)

橋本幸男報

不快指数金魚のように口開けて まさる
 出目金の貫録見せた泳ぎよう 春雄
 一つ死に二つ死に金魚鉢空になり 竹青
 くたびれて金魚今宵もすくわれる 夏生
 夕立に思いもかけぬとゆが漏り 没食子
 夕立へヘッドライトのお化けめき 草右
 年頃の悩みは売れぬにあるかしら 重田
 かたつむりのなみ一生涯を負い 風仙洞
 定年後の悩みを妻にはげまされ 竹莊
 子に逝かれ世にも淋しき水入らず 凡平
 隣から水差しに來てあてられる 愛論
 子は嫁ぎシラヤマだけの水入らず よしを
 十年目家風の流れの色となり 宏子
 水入らずミシンの横で飲んでる 路郎

杏林川柳会

(大阪市)

中島生々庵報

しぶちんの折詰洗ったように食べ 生々庵
 半分に値切つてそれでも惜しい寄附 五十六
 しぶちんもこうなりや無形文化財 野迷路
 しぶちんに寄附を出さざる腕のよき 一伸
 しぶちんが二号をおいてかせがる 小石

しぶちんで名高い人の二号なり 阿茶
 一千万投げ出ししぶちん見直され 一哲
 けちんぼうやめ暮しを苦にもせず 太希志
 しぶちんの彼には彼の主義があり 路郎

南海電鉄川柳会

(大阪市)

辻 圭水報

ドライブクニ一百万弗の都市は下 句念坊
 ドライブに新車で出たが死出の旅 ベ女
 ダンプカーに突らひドライブ恐くなり 貴山
 ドライブも一文無 ではチャンス逃げ 静幸
 浮名立つたはドライブ以来なり 雄声
 ドライブと云えは淑女もつて来る みなづき
 マイカーが欲しいドライブ出来る腕 宏子
 ドライブの新車でないのが哀れなり 圭水
 ドライブへ誘う気持を知りながら 八郎
 ドライブに連れて行きたい方が来ず 路郎

コケヨ川柳会

(大阪市)

川口理休報

面談中電話の主のあまい声 たけし
 求人難委細面談を低姿勢 節子
 ガード下拾った恋で身を崩す 昭一
 面談の店主仕事の手を止めず 留純
 ガード下酒と女と葉あふれ 龜心
 サンングラスなつき合つて闇に消え 瑤己
 サンングラスかけてチビサングラス見 理休
 サンングラスかけてる連れが文句つけ ぼたる

諫早川柳会

(諫早市)

川岡蠶眼子報

悪友も程よく酔うて肩を組み 好子
 悪友の呼出し電話妻が出る 松堂
 悪友とつじつま合せ 朝俣り 薫
 悪友という名に似合わぬやさ男 三重
 悪友の名案妻に見破られ 作一
 悪友のよしみパチンコ代借りる 友則

悪友の義理差入れにまで及び 重幸
 悪友を誘い二三次会三次会 今日太
 妻の悪友またデパートへ誘い出し 梵鐘
 責任をとる悪友が頼母しい 青馬
 妻が来ただけで悪友おそれ入り 叫峰
 見送つて来た悪友にもられる 五竜

富柳会句会

(富田林市)

阿部柳太郎

新築は天びん棒で江州から 摩天郎
 新築の家道すがら値詰みする 呂人
 新築と月賦ずくめで出来上り とも子
 虫葉も娘の恋は役立たず 紅月
 弱虫の夫に替り妻が起ち 美代
 虫干しに母の遺品の香がしみる 雄声
 出戻って教壇から説く夫婦愛 周一
 出戻りに氣を使つてる里の母 静林庵
 出戻りの少しやつれた片そくば きはち
 出戻りがすまなさそうにかしこら 六竜子
 肩書きが嫁して夫に従えず とも子
 出戻りの女同士にあるべつ 視尚 史
 元氣すぎ三途の川迄一走り 八郎
 まっ先に豆秋さんに合に行き 吉太郎
 夫婦喧嘩出来ぬ所へ一人旅 柳太

宴会・出張パーティ・折詰弁当

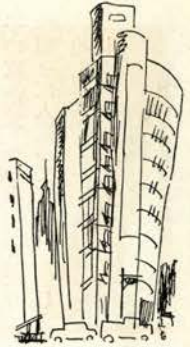
梅里ノ店

大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
 TEL(七七)三九三五番

鮎の店 アベノ橋近鉄地下食通街
 TEL(七七)〇一四七番

串の店 千日前大劇裏
 TEL(三三)二七二〇番



柳樽室

路郎生

★狭い庭先で、萩の花が咲きこぼれている。それだけでも秋を思わせてくれる。

★前号は大変好評だった。編集部は気をよくしている。この上もご支援ごべんたつをお願いする。

★夏から秋口へかけて、各地で盛んに大会が催される。これからの文化月を指して、ますます盛んに開催されるであろう。それについて編集局はいよいよ忙がしくなる。こちらは幾ら忙がしくなってもいいから、出来るだけいい句やいい原稿を寄越して欲しい。

★句集や単行本も毎月机上を賑やかにしてくれるが、詩・歌・俳句の出版に比べると未だしと云いたい。いい句集、いい単行本がどしどし上梓されるのがのぞましい。我が社からは新進作家の橋高薫風子君が句集「有情」を出した。天馬養行所からは河野春三君が年来のエッセイを蒐めた「現代川柳への理解」を出した。これはなかなか立派な本だ。私が提灯を持つより一編読んで見たまえと云いたい。

★河野春三君はもつと若いと思っていたら三月一日で満六十歳だそう。最近橋元紋太君が病み川上三太郎が入院して手術すると云う

騒ぎだ。私も四年前に失語症失書症で仆れたが、今では元気で働いている。紋太君も三太郎君も次第に快方に向かっている。それだからいいようなもの。一時は心を暗くさせられたものだ。それにつけても春三君らの健在は柳界のために祝福すべきであろう。

★紋太君のことを書いたついでに云っておきたいのは「きやり」の消息にホンの二、三行で紋太君が第一線をしりぞいたように報じていたが、あれは筆者として心すべきことだと思ふ。仮りに紋太君が第一線を去るとすれば「ふあうすと」には大々的に報じられるであろうし、記念の川柳大会も催されるであろう。その時にはじめて、そのことを報すべきで今回の報道は少しく軽率すぎるうらみがあるもつとも筆者が深い意味で書かれたものでないことは判るが、紋太君が見たら二、三行の記事ではあるが心を痛めるであろうと思ふ。それは紋太君自身のことではなく「ふあうすと」の将来と云う問題が紋太君を苦しめるであろうと思われたからである。この際、編集を若い人たちにまかすと云うことは第一線をしりぞくと云うこととは別であることを知っておく必要がある。

★私は十月七日の東北川柳大会へ招かれて行くこととなった。この日は我が社の定例会の日で、「有情」出版祝賀の集まりがあるので、一寸困ったが、あとになつたので出かけることにした。もつとも十三日には大阪市民文化祭の川柳大会が控えているので出来る限り急いで帰るつもりだ。

★堺市の市民文化祭は十月二十四日午後六時から新在家町の善宗寺で開くそう。★私は寒さにバカに弱くなった。十一月頃からは冬もり状態で暮らすだもう。しかし退屈をしない性格なのでご放念を乞う。

ペンの散歩

▼阿部佐保蘭氏の「吉川英治と川柳」はタイムリーでありがたかつた。生きのいい原稿をいただくとページがビチビチはねるよう。東野大八氏の「伴睦」という川柳人「はいつもながらの才筆で一氣に読ませる力は、さすがに筆の人である。東野大八氏同様毎号ご執筆たまわる富士野鞍馬氏のお仕事も大変な努力だとおもふ。参考資料に積み重ねられているのが目に見えるようであった。頭がさがる。

▼中島生々庵氏にも今月はウンとごムリを願った。こと医学に関する読みものは本誌独自のもので、前号の福井野迷路・山川阿茶両氏の「私の秘密」は予想どおりの好評だった。

▼本号は読書の秋にふさわしく好読みものが目白押しに盛観だ。▼読者のみなさんからもいい原稿をドシドシお寄せくださるよう期待しております。

▼長かった夏もどうやら秋にパトントッチャをしてくれた。さあ作らんかな命ある句を！ (二三夫) 十月例会 川柳支部

車鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館、★南海電鉄句会・18日(木)六時、題、試運転・私生活・にせ札、所、難波高架下親和クラブ、★みなと句会・23日(火)六時、題、愛称・小型・相談、所、神戸市電相生町下車東五十米高架下国鉄神戸変電区会議室、★かがみ句会・2日(火)六時、題、むだ足・紳士・古参・秋祭・弱点、所、池田古心居、★阿倍野句会・20日(土)七時、題、野心・理性・菊あやかる、所、阿倍野区松崎町3ノ1(水)七時、題、砂・カラム・めぐみ、所、市電玉造南一〇〇米大阪信用金庫玉造支店、★京都句会・10月16日(火)題、砂・逢う・傍観、所、四条繩手仲源寺

近刊紹介

▼小野十三郎詩集「とほりもないねがい」が一九六二年六月一日東京都千代田区神田神保町一ノ三思潮社から発行された。現代日本詩集第一回配本である著書は「あたつていなきよ」「とほりもないねがい」など二十編の詩の作品が収録してある。A列5型、七十頁、定価三六〇円。

▼小野十三郎著「詩論十統詩論+想像力」が一九六二年九月一日前記思潮社から発行された。B列6型、二百九十頁、定価六八〇円。

▼川柳青森支部を青森県南郡尾上町大字高木に九月五日創設。支部長木村涼人氏。

▼川柳選者に推薦一九七月七日川柳忌に於て次の六氏が川柳選者に推薦された。傍島静馬・石倉旅風・小西雄々・藤井明朗・河相す、む・内藤さき子の諸氏。

社・の・黒・板

京都千代田区神田神保町一ノ三思潮社から発行された。現代日本詩集第一回配本である著書は「あたつていなきよ」「とほりもないねがい」など二十編の詩の作品が収録してある。A列5型、七十頁、定価三六〇円。

川柳句集 新秋を指して出た！
橋高薫風子著 麻生路郎序

川柳 有情

定價二百五十円 送費六〇円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入つて採まれ、川柳編集部員として精進を続けている。前途ある好作家である。

約七年間の習作「有情(うじよう)」を上梓して弘く世に問うことにした。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉区区内万代西5丁目25
発行所 川柳雑誌社
電話大阪(67)6081振替口座大阪75050



働く人の保健剤

8種の必須アミノ酸・9種のミネラル・12種のビタミン
これら29種の栄養を合理的に配合した新しい栄養剤です
だるい・疲れる・元気がない・こんな方にとにかくお試し下さい

強力 モリアミン M&M

森下製菓株式会社
大阪・道修町
1000円
1000円

会長・麻生霞乃女史
川柳 婦人友の会 会員を募る
川柳雑誌社内 川柳婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……
連絡事務所 大阪市南区ニッ井戸町23
山川阿茶

取次所 川柳雑誌社

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもの
もろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的である。その川柳がいかんにして発生し、
経過し、今日に至り、将来に動くか、しか
もその作り方は、味わいは——以上を最
も明快にわかりやすく、斯界の第一人者た
る著者が答えているのが本書である。

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味わい方—
価 二五〇円
送費 七〇円

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

新川柳観賞

麻生路郎著 好評噴々

川柳の味わい方・五百数十句
(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から
川柳を手がけているというから川柳
歴はもう五十五年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出して
いる「川柳雑誌」に掲載されたもの
を中心にその他の柳話や句集からひ
ろった五百六十三句について、ひと
つひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞
の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方
がなかなかうがっていて、一気に
読ませる魅力がある。
大坂市住吉区茨田西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話大阪(677)六〇八一
郵務口座 大阪七五〇五〇

価 二五〇円
送費 八〇円
B6版
二五〇余頁

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

- ためいき (十句以内) 川村好郎 選
- すべり込み (十句以内) 杉谷湖山 選
- 旅 先 (十句以内) 水谷竹莊 選
- 主 役 (十句以内) 丸尾潮花 選
- ベレー帽 (十句以内) 河村ひ満 選
- 里 心 (十句以内) 小西雄々 選

毎号募集

- 近作柳梅 (毎月廿句以内) 麻生路郎 選
- 川柳塔 (毎月十句以内) 北川春葉 選
- 文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎 選

投稿規定

- ▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▼ 「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。
- ▼ 「川柳塔」は誰でも投句が出来る。

川柳雑誌 第三十七号
定価 九〇円 (送料六円)

半力年 五七六円 (寄附金)
一力年 一〇八〇円 (寄附金)
昭和三十七年九月廿五日印刷
昭和三十七年十月一日発行

発行所 川柳雑誌社
電話大阪(677)六〇八一
郵務口座 大阪七五〇五〇

編集者 麻生 幸 二 郎
行方 阿茶 人 祥 生 幸 二 郎

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿七年十月一日 発行 毎月一回一日発行

編集 川柳雑誌社

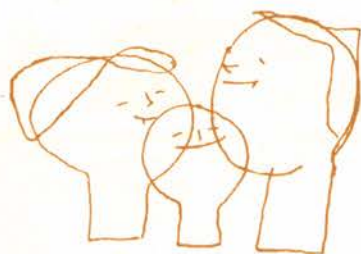
社生を三郎 発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区東長崎西五丁目一五番地 電話七五〇七七一(夜)〇八二

定額印刷部七五〇五〇番

定額九十四円(送料別)

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

疲労・神経痛・筋肉痛・便秘に
早く強いききめ!

吸収が早く、すぐに生体作用に有効な型となり
強い力を発揮します。のび時、のびた後でも
いやなニオイはありません。

●無臭・持続性の新活性型ビタミン

ビオタニン

(5mg錠・25mg錠)各30入 100入 300入 他に散



三共株式会社

イ-8



2階電車・ビスタ・カー・注内浴湯房 シートラジオ
公衆電話など設備した豪華特急です

大阪・名古屋・伊勢をいちばん便利に結ぶ

近鉄特急

大阪一名古屋 ノンストップ 2時間18分

●は 2階電車ノンストップ特急
ほかの特急は途中 鶴橋・八木・中川と津・四日市・桑名に停車
大阪上本町発 ●7.00 ●8.00 8.15 ●9.00 9.15 ●10.00
11.15 ●12.00 12.15 13.15 ●14.00 14.15 ●15.00
●16.00 16.15 ●17.00 17.15 ●18.00 19.15 ●20.00
近鉄名古屋発 ●7.25 7.40 ●8.25 8.40 ●9.25 9.40
●10.25 11.40 ●12.25 13.40 ●14.25 15.40 ●16.25
16.40 ●17.25 17.40 ●18.25 ●19.25 19.40 ●20.25

■伊勢へ
大阪から 1時間55分 名古屋から 1時間33分
座席指定特急券のお求めは
14日前から 近畿日本ツーリストと日本交通公社全国営業所
5日前から 近鉄上本町・名古屋・宇治山田と特急停車駅

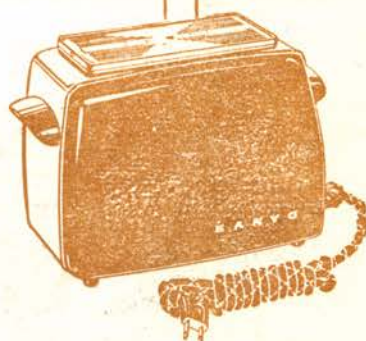
近鉄特急のリザーブ・近鉄沿線へのご旅行は ゆき
届いたサービスの近畿日本ツーリストへお申しつけ
下さい 東京都千代田区八重洲口 国際
観光会館1階 231-4131のほか全国に120営業所

本社 大阪市 天王寺上本町6

近畿日本鉄道

パンを入れると
スイッチが入り
焼き上ると
パンが飛び出る

完全自動トースター



SK-111型 現金正価 2,400円

SANYO

サンヨートースター

三洋電機株式会社